

KISHIDAIA

Bulletin of Tokyo Spider Study Group

No. 1 ~ No. 10 新版復刻



東京蜘蛛談話会会誌

東京蜘蛛談話会会誌

KISHIDAIA

No. 1 1969, 1

キシダイアの発行にあたって

萱嶋 泉

東京クモ談話会が誕生して2年になる。その間、記録に残っている会合でも24回開いたのである。最初の頃はただ集まって近況を語り合って楽しんでいたが、次第に会らしい、いろいろのことが、決められて来た。寄書を毎回していて、これが唯一のこの会の記録であった時もあったのである。しかし、現在では、書記も居て、会合が持たれるときちゃんとノートに記録され、寄書も大きな画用紙に1枚書くと、それをゼロックスにかけて15枚にして、関係の方々に発送するまでに発展してきた。

昭和43年10月4日に岸田久吉先生が、突如として逝去されて、我々のグループでは10月19日の土曜日より、毎土曜日に岸田先生宅に集会して、談話会を開き、この会の仕事として先生の図書の整理を始めたのである。同年12月28日の土曜日までに10回ばかり会を持ちつつ図書の整理ができた。その時に話されたことが、キシダイアの発行の件であった。私共は岸田先生の蔵書の膨大であるのに驚き、また、貴重な書物の多いのにも敬服したのである。さらに岸田先生の未発表の多方面にわたる論文の原稿に接した時、なんと偉大な先生であったろうと、感激した次第である。この先生をなんとかして後世に伝えるのは私共、談話会の仕事ではないかと考えるようになった。そこでレギュラーメンバーで知恵をしぼった結果、考えついたのが、キシダイアの発行であった。キシダイアという名は、八木沼先生が岸田先生に奉獻して、ブチワシグモ属につけた属名である。これを私共の会の機関紙の題名として、これから月刊として出すことを話合ったのである。毎月行われる談話会の記録の報告が主であって、それに有志の者のクモに関する研究論文が一つぐらいのものを目標に発行することにした。だから決して堅苦しいものではなく、誰でも読める楽しいものにするのが私共の念願である。

クモの称呼

岸田 久吉 (遺稿)

I. 和名など標準和名としては、誰しもクモだという。今日学校教育が普及して居り、日本のどこに行ってもクモならば通じる。さてこのクモの出典は何れに求められるか、大槻丈彦氏の編にか

かわる「言海」を見ると、「アシダカグモの漢名の喜母の音転といふはいかがか」と出ている。これでクモと云うYがXから出ていることはうなづける。その喜母の出典はどうであるか、やはり未だ充分に納得の出来ない節がある。それはとにかくとして、このクモと言う名が、一世を風靡してしまったので、事來この名を用いた地方がどれ位あったのであるかが今日では判然しかねる。しかしあかっている所は、東京都、神奈川、群馬、山梨、静岡、長野、岐阜、福井、三重、滋賀、京都、兵庫、香川、徳島である。

クモメと云う名でクモを呼んでいる地方は、八丈島である。この地方ではネコのことをネコメ、ウシをウシメ、カラスをカラスメ、マムシをヘビメと言っているが、併し、カメ、サメなどはそのままである。

クボ、この名でクモを呼んでいる地方はかなり広い。筆者は少年時代から蜘蛛の研究をしているが、郷里舞鶴市では、クモと呼ぶときざっぽいと言はれたものである。母も祖母も生物には相当興味のあった人であるが、クボと呼んでいた。決して、鼻のつまつた風邪の声ではなかったのである。兵庫、鳥取、福井、石川などでは普通で、富山、新潟、群馬、栃木、福島、山形、秋田、青森、岩手、宮城、茨城、千葉などもクボと云うところがある。

ケモと呼ぶ地方も、かなりある。クブと言う地方もある。新潟、山形などで、沖縄にもクブという所があるのは面白い。

コブと呼ぶ地方は九州が多い。小野蘭山の重修本草啓蒙に薩州（鹿児島県）でコブと言うと書いてある。九州全土と奄岐、対馬、五島の島々でもコブと呼んでいる。

クバ、この呼び方は沖縄地方に限っているが、クバアと言うところもある。

クオ（クオウ）と呼んでいる地方は石川、新潟、富山などの一地方であるが、余り広くない。

コボ、実に変な呼び名であるが、石川、福井の山間地方である。

ケボ（ケエボ、ケボウ）石川の一部。

キボ（キイボ）石川の一部。

キモ。これも石川県下であるが珍しい。

コジ（コウト又はコトウ）熊本、鹿児島でこのように呼んでいる所がある。

コク。鹿児島県の一部で呼んでいる。

コウ（コオウ）佐賀、長崎、熊本の一部で、このように呼んでいるが珍しい呼び名である。

コム（クム）韓国で呼んでいる。

コムイ（クムイ）韓国、北朝鮮では普通にこのように呼んでいる。

ジョグルマ。新潟県の一地方でデグモにこのように呼んでいる。

ジボジボ。山形県下でやはりデグモにこのように呼ぶことがある。

トラ。福井、滋賀などでトラということがあるし、ハエトリグモに対してのみトラと呼ぶこともある。

トラシジョ。山形と島根とに、この名をもってクモを指す所がある。山形ではデグモを指すことが多い。島根ではハエトリグモだけを言うものの如くである。トラ、トランジョ等は、ハエトリグモの漢名「蠅虎」から出ているかも知れない。筆者は以前ある国文学者からヨウコが伝々と、ハエ

トリグモのことを話すのを聞いて驚いたことがある。下学集という本にはハエトリグモにヨウコと假名が振ってあるくらいであるから、国文学者は知っていたことであるかも知れない。

ヒトモジ（又はヒトボシ）滋賀、群馬の両県で、人家またはその附近にいるクモを呼んだらしい。オオヒメグモを特にこの名で呼ぶ所がある。往々、オオヒメグモには発光バクテリアが寄生して、発光する場合があることが知られていることから見ると、火を点じるという意味であるから、このクモに限っての名でないかも知れぬ。

ササガニ。言海には「蜘蛛の異名、枕詞を直ちに名としたのだ」と書いてある。「クモの体がカニに似て、ササ原に住むからだ」とも言う。又或人は「細小なるカニに似た意味だ」とも言う。

―― 統 ――

編集者注——この原稿は岸田久吉氏により昭和10年ごろ書かれたもので、発表されずに今日に至ったものである。今回キシダイアの創刊を記念して、萱嶋泉氏により書き改められたものをここに発表した。残りは2号に載せる予定である。

談話会ノートより

— 東京蜘蛛談話会を紹介する意味で、記録ノートからある日の様子を再現してみよう —

◦ 第15回 1968年6月23日、日曜日 10:00a.m. ~ 3:30p.m.

於 萱嶋先生宅

出席者 八木沼先生、萱嶋先生、大河内氏、新海氏、国見氏、荒畠氏、松本

八木沼先生が IBP の東北大、加藤班の会議に出席の為、御上京。今日、18時の新幹線で帰阪なさるとのこと、その間に談話会に出席してくださった。今回は目黒高校の国見、荒畠両氏も参加された。浜村さんが来られなかったのは残念であった。

先ず、Acta の件、本決まりとなった由、報させていただく。又、八木沼先生は IBP の総合調査で木曾の御嶽に行くとのこと。土壌生物の調査で Berlese Funnel で分離したクモ、ダニ、カニムシ、メクラグモ etc. の表を見せていただく。伊豆、淨蓮の滝の暖簾にはクモの絵が描いてあるのを見せていただく。

ヌサオニグモの学名、和名の変遷の事、ミズグモの再発見、キムラグモの四国、台湾分布可能性のこと、クモの網をテントに力学的応用の件（水平網、ドーム網）、イボカニグモ（仮称）が新属になるであろうこと、と話題は広くて八木沼先生の話は有意義であった。

いろいろ人の消息が話になった。岸田先生の御健康を気付かわれた。

◦ ズグロオニグモの属名には Yaginumia を使用してもよいのではないか？ Neoscona が使われているなら、同程度の違いのある (Araneus s.lat と) Yaginumia は使用してもよい。

◦ 現在会員は 230名ぐらいとのこと。

◦ Fragmenta Entomologica には多くのクモの論文がのっているとのこと。

八木沼先生の夏期休暇中の予定

IBP へ参加, *Nesticus* の論文の完成, 追手門学院創立80周年記念の学院史の編纂及び, 依頼標本の同定, 又, カラーTVで“自然のアルバム”の放送録画をなさっているとのこと。放送は9月。

Black widow の標本を出席者全員いただく。Mexico産のもの。

寄せ書き送り先: 吉倉先生, 中平先生, 小野先生, 小松先生, 高鍋高校(石野田先生, 築地先生, 松山先生)。

小生のクモの写真をみていただく。

Record. Seiji M.

岸田久吉氏蔵書目録(真正蜘蛛類)

故岸田先生の蔵書の内, クモに関するものを連続で紹介することにした。細かい別刷りなどは未だ整理が進んでいないが, 単行本からお知らせする。尚, これらの図書の管理は当談話会があたっている。リストは年代順である。

A. 単行本

1. C.Clerck (1757) Svedska Spindlar
2. " (1788) ENGLISH SPIDERS
3. Hahn (1831) Arachnide Band 1
4. " (1834) " " 2
5. C.L.Koch (1836) Arachnide Band 3
6. " (1837) " " 4
7. " (1839) " " 5
8. " (") " " 6
9. " (") " " 7
10. " (1841) " " 8
11. " (1842) " " 9
12. " (1843) " " 10
13. " (1845) " " 11
14. " (") " " 12
15. " (") " " 13
16. Walckenaer (1837) HISTOIRE DES INSECTES 1
17. " (") " " 2
18. " (1844) " " 3
19. " (1847) " " 4
20. " (") " " ATLAS
21. E.F.Staveley (1866) BRITISH SPIDERS

22. L.Koch (1871) Die Arachniden Australiens
23. " (1884-1889) "
24. " (1871-1883) "
25. " (1873) Harvesting Ants and Trap-door spiders
26. Simon (1875) LES ARACHNIDES II (UROCTEIDAE, AGELENIDAE, THOMISIDAE, SPARASSIDAE)
27. " (1878) " IV (DRASSIDAE)
28. " (1884) " V (THERIDIONIDAE)
29. " (") " V (")
30. " (1929) " VI (ARGIOPIDAE)
31. A.T.Bruce (1887) Observation on the Embryology of Insects and Arachnids
32. Godman, Salvin (1889) BIOLOGIA CENTRALIANAMERICANA ARACHNIDA
33. W.Wagner (1894) L' INDUSTRIE DES ARANEINA
34. T.Thorell (1895) SPIDERS OF BURMA
35. P.I.Pocock (1900) THE FAUNA OF BRITISH INDIA
36. W.Bosenberg (1901) Die Spinnen Deutschlands
37. Dahl (1912) Seidenspinne und Spinnenselde
38. Fabre,J.E. (") THE LIFE OF THE SPIDER
39. C.Warburton (") SPIDERS
40. J.H.Comstock (") The Spider Book
41. A.Petrunkewitch (1913) A Monograph of the Terrestrial Paraectozic Arachnida of North America
42. ファーブル, 英 義雄訳 (1918) ファーブル昆虫記 蜘蛛の生活
43. 山本 正 (1925) 自然研究 第7編 クモ
44. T.H.Savory (1928) The Biology of Spiders
45. 松村 松年 (1928) 面白き蟲界の教材
46. 江崎 傅三 (1930) 多足類・蜘蛛類
47. 湯原 清次 (1931) 蜘蛛の研究
48. ファーブル, 林達夫・山田吉彦訳 (1931) ファーブル昆虫記
49. " 小牧近江訳 (1931) ファーブル昆虫記 (9)
50. 岸田 久吉 (1933) 蜘蛛の生活
51. T.H.Savory (1935) The Spiders and Allied orders
52. " (") The Arachnida
53. 小松 栄 (1936) 原色大日本蜘蛛類図説 上
54. 斎藤 三郎 (1938) 日本動物分類 No.23 真正蜘蛛目 (I)
55. " (1941) " No.37 " (II)
56. 千国安之輔 (") 日本アルプス山系の蜘蛛

57. 堀 関夫 (1942) 鶴. 蜘蛛. 蜜蜂
58. 山本 隆 (1943) 蜘蛛の観察
59. 細野 善熙 (〃) 蜘蛛の習性
60. 萱嶋 泉 (〃) 台湾の蜘蛛
61. 常木 勝二 (1948) クモの生活
62. 関口 晃一 (1952) クモの生活
63. 八木沼健夫 (1956) クモの世界を探る
64. ファーブル, 中村浩訳 (1957) ファーブル昆虫記 6
65. 408. M.G.L. (1958) Some Venomous Animals of the far East
66. 斎藤 三郎 (1959) 原色蜘蛛類図説
67. 八木沼健夫 (1960) 原色日本蜘蛛類大図鑑
68. Komatsu, T. (1961) Cave Spider of Japan, Their Taxonomy Chorology and Ecology
69. 植村 利夫 (〃) 日本産 Aranes 属の分類学的研究
70. 萱嶋 泉 (〃) 森林害虫の天敵としての蜘蛛の研究
71. J.H.Emerton (〃) The Common Spiders of the United States
72. 八木沼健夫 (〃) 日本産蜘蛛類の科属種の検討
73. T.Yaginuma (1962) The Spider Fauna of Japan
74. 錦 三郎 (1964) 蜘蛛百態
75. 萱嶋 泉 (〃) クモの生活
76. " (1966) 三多摩地方の蜘蛛の研究
77. 常木 勝二 (1967) クモの生活
78. 植村 利夫 (〃) 段階変異と進化の過程

〔文献紹介〕

The Molting Behavior of the Black Widow Spider, *Latrodectus mactans*.

by DAVID W. HAGSTRUM

ANNALS OF THE ENTOMOLOGICAL SOCIETY OF AMERICA Vol.61. No.3, 591-593, 1968 May.

これは、クロゴケグモの脱皮過程を時間的にとらえたものである。その概要を紹介する。

クモの脱皮は4対の脚と出糸突起を網に付着して懸垂姿勢で行われる。脱皮開始2時間前から、基節間節の定期的なけいれんが始まり、時間と共に頻繁になる。脱皮は下方への圧迫運動で開始され、基節間節の上の背甲線にそって横の割目が作られる。その間に腹部筋肉の蠕動運動により皮膚は後方に送られ出糸突起の部分に、しわがよる。この時間は平均4.3分かかる。背甲は腹部皮膚に付着しており、後に出糸突起の部分に引かれる。“下方へ引く”そして“ゆるめる”動作は古い脱殻から、脚、触肢、上顎を除くのに役立つ。第2の相はゆるめる動作のようで、それぞれのサイクルは2~20秒である。下方へ引く運動の総時間は4対の脚を除去するのに平均13.8分かかった。脚は短い脚が先に自由になる。脚が自由になると、地面と古い脱殻と平行にまっすぐ出される。次に

脚は横へ引かれ、わずかに増大した後ゆるめられ中央に戻る。この分離動作は 5.3分かかる。脚はその後、曲げられ胸板の方へ引かれる。それから、横に引く運動が始まる。左右の脚が向い合った方向に定位しながら、前後にうねる運動をする。その後、胸板を横切って引かれる。“引く”そして“うねる”動作の各サイクルは平均15秒で、スタートの時、最も速い。この運動は 8.2分続く。最後のうねりの運動の間、牙はけいれんを始める。第1，4脚は網をつかむために、前後に伸ばす。それから、9.9分後、クモは網上で体重を脚で支えて向き直り、出糸突起を離した後、短い距離歩く。そしてクモは長い間静かにとどまる。牙は運動しつづける。クモが脱皮殻に数時間又は1日後に戻り、口器を腹部皮膚などに置いて脱皮分泌物を利用しているようのが3例見られた。脱皮殻は地面に落とされるが、ペトリ皿の縁にからませるものもあった。正常状態での脱皮過程は平均40分である。出糸突起を糸に付着させているのを実験的に切り、脚だけで支えているクモでは、同様な脱皮行動型を示すが、脚が古い皮膚から除かれると、クモは地面に落ちてしまった。

参考文献 : Browning, H.C. 1941, The relation of instar length and external and internal environment in *Tegenaria atrica*. Proc. Zool. Soc. London 111. 303-17: 1942 The integument and wolf cycle of *Tegenaria atrica*. Proc. Roy. Soc. London 131. 65-86: Fischel, W. 1929, Wachstum und Häutung der Spinnen. 1. Mitteilung: Studien an Retitelen Spinnen. Z. Wissenschaftliche Zool., Leipzig. 133(1), 441-69: 1930 Wachstum und Häutung der Spinnen 2. Mitteilung: weitere Beobachtungen an Retitelen und Vaganten (I) Azaneen. Z. Wissenschaftliche Zool., Leipzig. 136, 78-107: Legendre, R. 1962 Estudes sur les Archaea (Araneides) IV La Mue. Bull. Mus. Nat. Hist. Natur. Paris. 34, 459-63: Warren, E. 1925 Notes on the ecdysis of a spider. Ann. Natal Mus. 5, 231-4

—— 日本におけるクモの行動に関する報告はほとんどなく、外国の文献も紹介される期会がない。昆虫では農工大の日高助教授を中心にして、モンシロチョウなどで行動解析が行われている。クモでもこの分野の研究が行われるであろうし、興味を持っている人も居ることと思う。ここに、わずかではあるがクモの行動に関する文献をあげることにする。

Jonathan Reiskind (1965) Self-Burying Behavior in the Genus *Sicarius* (Araneae, Sicariidae). Psyche. Vol.72, No.3 218-224,: HERBERT W.LEVI (1967) Predatory and Sexual Behavior of the Spider *Sicarius* (Araneae, Sicariidae) Psyche Vol.74, No.4, 320-330,: Jerome S. ROVNER (1967) Acoustic Communication in a Lycosid Spider (*Lycosa rabida* Walckenaer). Animal Behaviour, 15, 2-3, 273-281pp.: Häken HALLANDER (1967) Courtship display and habitat selection in the wolf spider *Pardosa chelata* (O. F. Müller). OIKOS 18,1 145-150pp.: Edward J. Kuenzler (1958) Niche Relations of Three Species of Lycosid Spiders. ECOLOGY Vol.39, NO.3, 494-500.

(大河内 哲二)

東京蜘蛛談話会公誌

KISHIDAIKA

No. 1

0000
0000

1969, I

キシダイアの発刊にあたって

董 島 豊

東京クモ談話会が誕生して2年になる。その間、記録に残っている公会でも24回開いたのである。最初の頃はただ集って近況を語り合って楽しんでいたが、次第に企らしく、いろいろなことが、決められて来た。寄書を毎回していて、これが唯一のこの会の記録であった所もある。とにかく、現在では、書記も務め、会合が持たれるときうんヒノートに記録され、専用も大きな画用紙に一枚書きと、それをゼロックスにかけて5枚にして、関係の方々に送付する形で発展してきた。

昭和43年10月4日に岸田久吉先生が、突如として逝去されて、我々のグループでは10月19日の土曜日より、毎土曜日に岸田先生宅に集会して、お詫問と附添、この会の仕事として先生の団書の整理を始めたのである。同年12月28日の土曜日までに10回ばかり会を行つて、団書の整理ができた。その時に始されたことが、キシダイアの発行の件であった。私共は岸田先生の蔵書の形態であるのに驚き、また、貴重な書物の多いのにも感服したのである。さらに岸田先生の蔵書の多方面にわたる論文の原稿に接した時、なんと偉大な先生であったろうと、感動した父兄である。この先生をなんとかして後世に伝えるのは私共、談話会の仕事ではないかと考えるようにになった。そこでレギュラーメンバーで知恵をしぼった結果、考えついたのが、キシダイアの発行であった。キシダイアという名は、ハ木沼先生が岸田先生に挙げて、ゲーリング在基につけた綽名である。これを私共の会の機関紙の題名として、これから月刊として出すことを企画ったのである。毎月行われる談話会の記録の報告が主であって、それに歴史の者のクモに関する名所を紹介するのが一つぐらいのものと目標に発行することにした。だから決して堅苦しいものではなく、誰でも読める楽しいものにするのが私共の念願である。

クモの称呼

岸田 久吉（追憶）

I. 和名など標準和名としては、誰しも「クモ」だという。今日學校教育が普及して居り、日本のどこに行ってもクモならば通じる。さてこのクモの出典は何れに求めらるるか。大河内さんの中にかかる「言海」を見ると、「アシダカグモの漢名の喜母の音既かといふいふや」と引いている。これでクモと云う字がXから出ていることはうなづける。その喜母の音既はどうであるか、やはり未だ充分に納得の出来ない節がある。それはとにかくとして、このクモとすう名を、一世を風靡してしまったので、事來この名を用いた地方がそれ位あったのであるから今日では判然しかねる。しかしわかっている所は、東京都、神奈川、群馬、山梨、静岡、長野、岐阜、三重、滋賀、京都、兵庫、香川、徳島である。

KISHIDAIA

No. 2

1969, 2

クモの称呼 (続)

岸田 久吉 (遺稿)

Ⅱ. 漢名 漢名で普通なのは蜘蛛である。李時珍の本草綱目を見ると、「王義石の学説を接じると、一面の網を設ける、物が触れると後にこれを誅する。誅の義を知るものであるから蜘蛛と言うのである。」と書いてある。今日では蜘蛛と書いてクモと読ませる外に蜘、或は蛛の一字でクモと読ませていることもある。筆者は蛛の方に重きを置いている一人である。

蜘蛛。 発音は拙謀であると言うが、クム・コム・コムイに似ていることが面白い。

罠蟲。 この字は前出の字をむずかしくしただけであるから発音は前の通りである。

蠍蛛。 関東より東での称とは、本草綱目に書いてある。侏儒と語転だと言うから、この場合には、クモには蛛の字が浮び上ってきそうである。

杜公。 斉の人の呼称である

喜子（嬉子・喜母）。 いずれも昔のアシダカグモにあててきた文字らしいが、記載を読んでみると、もっと外の種のクモらしい。

壁錢（壁鏡）。 これはヒラタグモを指すもので、ヒラタグモの住居巣の形からこの名が出たものと思う。この住居巣を支那では薬用にしたことが古書に出てる。

長踦（蟻蛸）。 これは喜子と同一のクモにあてた文字であって、我国でアシダカグモにこれをあてはめたことがあったが誤である。

蠅虎（蠅蝗・蠅豹子）。 この名はハエトリグモにあてた文字である。

螳螂（蜘蛛・顎當蟲・蜘蛛母）。 いずれもトタテグモを指したものにちがいないが、現在のどのトタテグモにあてた文字であるか判明しない。我国ではこれをジグモにあてているのは誤りである。それは支那の書に次のようなことが書いてあるからである。

「穴の上に蓋があり、穴の口を覆う」また「巣深きこと蜘蛛穴の如し。絲をその中にひきまわし、土と絲で蓋をつくり、完全に蓋す」「蓋をおしあげ、ハエや蠅の通りすぎるをうかがっており、もし通れば、ただちにとび出してこれを捕食す。蓋は地面と同色なれば、完全に蓋せるときは見わけさだかならず」とあることからトタテグモであることは、判然としている。

Ⅲ. マライ名。 ラバラバ (Laba laba) . クモ全体を指す。クンバシ (Kumbang) . クモや昆

虫など広く使用される。

クバ (Kumba)・コシバ (Komba)・コバテ (Koba)。このいずれもクモにもちいられると言うことである。これがもしほんとうであるとすれば、日本や支那でのクモの総称と少しく似ている。同一語から出発しているのかも知れない。

IV. 蒙彌名。蒙古ではクモのことを、アガルヂと言う。地方によっては、此ってアターキイという。

V. 欧州名。ドイツ名で Spinne (複数 Spinnen) であり、腹の黒い奴と言うように用いられる点は不快に思う。spinnen なる動詞としては糸を紡ぐという意味に使っている。

イタリア名。イタリア語では Ragno である。この意味は取り所のない奴という、ちょっと面白くない文字である。

フランス名。Araignées.

デンマーク名。Spinder.

イギリス名。Spider.

いずれも糸をつむぐという意味からきている。

VI. 学術上の名称。Araneus または Aranea はラテン語の複数名詞又はそれに群れを意味する語尾を付け加えたものである。(Aranei, Araneae, Araneida, Araneides, Araneina 等々)。

さらに大きい群名にする時には Acerata [触角の無き動物] Arachnida [ギリシャ語源でクモの類を意味している] Chelicerata [角牙のある動物]などを用いてある。普通、無角類とか蛛形類とか訳出しているのはこのような次第に因るものである。

完

編集者注 —— この原稿は岸田久吉氏により昭和10年ごろ書かれたもので、発表されずに今日に至ったものである。今回 KISHIDAIA の創刊を記念して、萱嶋泉氏により書き改められ No.1 に発表されたものの統編である。No.1 には和名の部が載せられている。

談話会ノートより

No.1 揭載のものよりも以前の記録だが、第10回、1967年最後の談話会の様子を見てみよう。

○第10回 1967年12月26日、火曜日 11:00a.m.~3:00p.m.

於 萱嶋先生宅

出席者 萱嶋先生、浜村氏、松本氏、新海氏、大河内

○今年の仕事の内容と反省

浜村氏：4月学部卒 卒論「水田に於けるクモの生態」

ポット試験による捕食量調査 イオウイロハシリグモ（幼）20頭／日（ウンカ・ヨコバイ）

キバラドクグモ 4~5頭/日 産卵4回 捕食量減
 セスジアカムネグモ 捕食量少 ∴ ドクグモが有望。生活史を調べたく人工飼育。
 蛍光燈下・苔bin内 4令~5令まで生存。体色が変化し、湿度調整難。
 飼料 *Drosophila*

ドクグモには砂が必要・砂の上をころがる(萱嶋先生)

採集 日光、那須方面。栃木県下 180種。タナグモの分類。

松本氏：千葉県動物誌 ワスレナグモ・ニシキオニグモ(?)

卒論テーマ ハエトリグモのテリトリー。眼の形態の相異。眼の発生 準備

小生：応用面の梨園調査失敗

8月奄美採集行 ジョウゴグモ・オオジョロウグモ・水にもぐるハシリグモ

9月伊豆大島行 採集物は現在整理中

新海氏：1月5日 養沢 カネコトタテグモ♀

ユカタヤマシログモの生活史調査 交接まで。産卵せず。♀5回・♂4回脱皮 寿命3年。

ムナボシヒメグモ 卵のうを背中にもつ。他のクモをおそう。

キノボリトタテグモ・ワスレナグモ・モグラグモ採集

萱嶋先生：桑園のアメリカシロヒトリとクサグモの調査 対象区、実験区の差

クサグモの Mass production 立体的な空間が必要

コクサグモの Mass pro. 平面的で可

} 飼には困らない。

桑の葉の所には張らず、収穫にえいきようは少ない。

次はドクグモについて行なう。

○ 明年の計画

浜村氏：キバラドクグモの生活史完成 Mass production

栃木県の Fauna.

就職

松本氏：卒論 ハエトリグモの行動・眼の section. 電気生理の中

千葉県の Fauna 調査

小生：卒論のテーマ決定 文献・予備実験

新海氏：ユカタヤマシログモの産卵観察

東京都の Fauna

体色変化のクモ

顕微鏡写真

寄せ書き送り先：八木沼先生、植村先生

次回予定：1月中に植村先生を迎えて「段階変異」の論文に関して話し合う。

J.Ohkohji

レギュラー・メンバー紹介

東京クモ談話会は、特に日を定めていないので、集合日を連絡するのが大変である。そこで自ずとレギュラーが決まってしまい、ほかには連絡のついた方をまじえて、懇談するようになってしまった。レギュラー・メンバーは、文献のお世話・御指導をして下さっている萱嶋先生・今度就職先の都合で、東京をたたれる浜村氏・東農大4年の大河内氏・写大を今年卒業された新海氏（いつも集合日の連絡をして下さっている）・玉川大学4年の小林氏、それに今年東邦大学を卒業した松本の6名である。

以上がレギュラー・メンバーであるが、談話会に出席して下さった方は、下謝名先生・八木沼先生・荒畠氏・国見氏・新海(明)氏・小野氏・築地先生（記録順）である。

また、1968年4月13日、植村先生のはからいで、第13回に、大きな会を開くことが出来た。その次第は *Atypus Nos.46-47* に載っている。
(Seiji M.)

岸田久吉氏蔵書目録

前回に続き故岸田先生の蔵書のクモ関係のものを紹介する。今回は、整理のついた別刷分である。尚、ここに掲げる図書は、当談話会で管理する。.

B. 別刷（その1）

1. Archer,A.F.: Studies in the Orb-weaving Spiders (Argiopidae), American Mus. Nov. No. 1922, 1958
2. Bristowe,W.S.: Notes on the Biology of Spiders. I. The evolution of Spiders' Snares.
Ann. Mag. nat. Hist., ser.10, Vol.6, 1931
3. Idem : Notes on the Biology of Spiders. IV. Further notes on Aquatic Spiders, with a description of a new species of Pseudoscorpion from Singapore. Ibid. ser.10, Vol.8, 1931
4. Idem : Notes on the Biology of Spiders. V. Theridion ovatum, Clerck, its habits and Varieties. Ibid. ser.10, Vol.8, 1931
5. Idem : Notes on the Biology of Spiders. VI. Spitting as a means of capturing Prey by Spiders. Ibid. ser.10, Vol.8, 1931
6. Idem : Notes on the Biology of Spiders. VII. Flies that triumph over spiders. Ibid. ser.10, Vol.8, 1931

7. Idem : Notes on the Biology of Spiders. VII. Rare Spiders and the meaning of the Word "rare". Ibid. ser.10, Vol.11, 1933
8. Idem : Notes on the Biology of Spiders. IX. The British species of Atypus. Ibid. ser.10, Vol.11, 1933
9. Idem : Notes on the Biology of Spiders. X. British cellar Spiders, with the description of a species new to Britain. Ibid. ser.10, Vol.11, 1933
10. Idem : Some new Termitophilous Spiders from Brazil. Ibid. ser.11, Vol.2, 1938
11. Idem : A preliminary note on the Spiders of Krakatau. Proc. zool. Soc. London.
Part 4. 1931
12. Idem : The mating habits of Spiders. A second supplement, with the description of new Thomisid from Krakatau. Ibid. Part4. 1931
13. Idem : The Spiders of Skokholm (S.Wales), with notes on a Phalangid new to Britain.
Ibid. Part2. 1935
14. Idem : The Spiders of Bear Island. Norsk. ent. Tidskr. 3. II.3. 1933
15. Chamberlin,P.V. and Gertsch,W.V. : The Spider family Dictynidae in America North of Mexico. Bull. Amer. Mus. nat. Hist., Vol.116, Art.1. 1958
16. Dahl,F. : Die Gasteracanther des Berliner. Zoologischen Museums und deren geographische Verbrietung. 1914
17. Ewing,H.E. : A field with the Spiders. Web Hunting in the Marshlands and Woodlands and Along the Lanes. The National Geographic Magazine Vol.64, No.2. 1933
18. George,W. and Peckham,E.G. : Genera of the family Attidae. with a partial Synonymy. Trans. Wis. Acad. Sci. Arts & Letters. Vol.6, 1881-83, 1886
19. Idem : Attidae of North America. Ibid. Vol.7, 1883-87, 1889
20. Idem : Spiders of the Phidippus Group of the family Attidae. Ibid. Vol.13. Part1, 1900
21. Gertsch,W.J. : The Spider genera Xysticus, Coriarachne, and Oxyptila (Thomisidae, Misumenidae) in North America. Bull. Amer. Mus. nat. Hist. Vol.102. Art.4, 1953
22. Idem : The Spider family Plectreuridae. American Mus. Nov. No.1920, 1958
23. Idem : Descriptions of American Spiders of the Family Symphytognathidae. Ibid. No.1981, 1960
24. Homann,H : Der bau der Nebenaugen als Taxonomisches Merkmal der Spinnen. Trans. Ninth. Congr. ent. Vol.2, 1953
25. Levi,H.W. : The Spider genera Enoplognatea, Theridion, and Paidisca in America North of Mexico (Araneae, Theridiidae). Bull. Amer. Mus. nat. Hist. Vol.112. Art. 1 , 1957

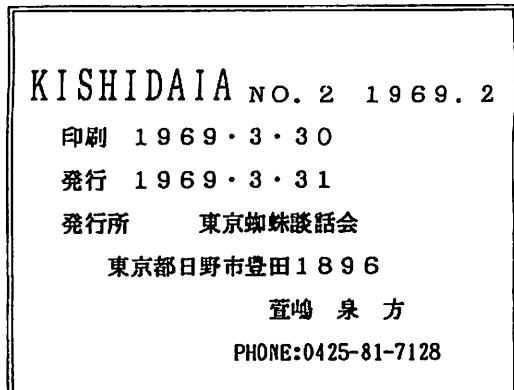
26. Merian, P. : Die Spinnen fauna von Celebes. Zool. Jahrbücher Bd. 31 Abt. f. Syst.,
1911
27. Montgomery, T.H. : On the Spinnerets, Cribellum, Colulus, Tracheae and Lung-Books of
Araneads. Proc. Acad. nat. Sci. Phila., 1909
28. Nathan Banks : The Spider fauna of the Upper Cayuga Lake basin. Proc. Acad. nat.
Sci. Phila., 1892
29. Idem : Some Arachnida from New Mexico. Ibid. 1901
30. Idem : Some Arachnida from North Carolina. Ibid. 1911
31. Idem : Notes on types of some American Spiders in European collections. Ibid. 1913
32. Idem : Revision of Cayuga Lake Spiders. Ibid. 1916
33. Idem : The Phalangida of New York. J. N. York nat. Soc., Vol.2, 1894
34. Idem : Additions to the list of long island Spiders. Ibid. Vol.4, 1896
35. Idem : Notes on Some Spiders of Walckenaer, Koch. and others. Ibid. Vol.9, 1901
36. Idem : New genera and species of Nearctic Spiders. Ibid. Vol.12, 1904
37. Idem : Arachnida from Baja California and other parts of Mexico. Proc. Calif. Acad.
Sci., Vol.1, No.7, 1888
38. Idem : Some Arachnida from California. Ibid. Vol.13, No.13, 1904
39. Idem : New Californian Spiders. Ibid. Vol.11, No.7, 1921
40. Idem : Papers from Harriman Alaska Expedition. Proc. Wash. Acad. Sci. Vol.2, 1900
41. Idem : Papers from the Hopkins Stanford Galapagos Expedition, 1898-1899. Ibid.
Vol.4, 1902
42. Idem : Some Spiders and other Arachnida from Southern Arizona. Proc. U. S. nat.
Mus. Vol.23, No.1223, 1901
43. Idem : Some Spiders and other Arachnida from Porto Rico. Ibid. Vol.24, No.1253,
44. Nathan Banks : A list of Spiders collected in Arizona by Messis, Schwarz and Barber
during the summer of 1901. Ibid. Vol.25, No.1284, 1902
45. Idem : Report on Arachnida collected by Messrs, Currie, Caudell, and Dyar in Briti-
sh Columbia. Ibid. Vol.51, No.2143, 1916
46. Idem : Synopses of North American invertebrates. XX. Families and genera of Arach-
nida. American Natural. Vol.39, No.461, 1905
47. Idem : Catalogue of Nearctic Spiders. Bull. U. S. nat. Mus., 72, 1910
48. Idem : Arachnida from South Georgia. Brooklyn Inst. Mus. Sci. Bull. Vol.2, No.4,
1914
49. Idem : New West Indian Spiders. Bull. American Mus. nat. Hist. Vol.33. 1914

50. Peckham, G.W. and Peckham, E.G.: New Species of the family Attidae from South Africa
which notes on the distribution of the genera found in the Ethiopian Region.
Trans. Wis. Acad. Sci. Arts & Letters. Vol.14,
51. Pocock, R.I. : On some new Trap door Spiders from China. Proc. Zool. Soc. Vol.1,
1901

百科事典のクモ

小学館から *Encyclopedia Japonica* が発刊されている。その第6巻254頁から256頁に「クモ」が載っている。読んでみると要領よく書かれていて、蜘蛛の概念は把握出来るように思う。254頁の図は、八木沼先生の原図と、Comstock のものであろう。内容を読み終わって満足し、255頁の写真と網の張り方の図を見て、おかしく思った。写真的ジョロウグモ（雄）とハナグモ（雌）が、又、図の色分けが違っているように思えたからである。ジョロウグモ（雄）とあるのは、ジョロウグモの雌の幼生のようである。写真是光っていてよくわからないが、雄であるならばもっと褐色のはずである。確かに頭胸部と腹部の大きさは雌ではないように見えるが、雌でも幼生の内は腹は小さい。そんなことで写真是ジョロウグモの雌の幼生のように思えるのである。又、ハナグモ（雌）の写真であるが、これは一見して違うのがわかる。写真是明らかに *Xysticus* sp. である。ハナグモの雌とは勿論、雄とも腹部及び脚の色彩がちがう。下段の図であるが、“赤”は繰り出している糸に入れているように思えるが右から2番目（横糸を張っている）のだけが、横糸ではなく、足場糸に“赤”が入っている。

上記のことを小学館に問い合わせたところ、Atypus No.48 の「トゲグモとカニグモ」にあるものとは大違いで誠に鄭重で、かえって恐縮しながら電話を切った。（松本誠治）



KISHIDAIA

No. 2

0080
0000

1969, 2

クモの称呼(続)

岸田久吉(遺稿)

Ⅰ. 漢名 漢名で普通なのは蜘蛛である。李時珍の本草綱目を見ると、「王羲石の字説を信じると、一筋の網を握ける、蜘蛛をかくと後にこれを説する。説の義を知るものであるから蜘蛛と言うのである」と書いてある。今日では蜘蛛と書いてクモと読ませる外に無い、或は蜘蛛の一文字でクモと読ませているところもある。筆者ばかりの方に重きを置いている一人である。

蜘蛛：発音はれじゆであると言うが、クム・コム・コムイに似ていることが面白い。

蠍蟲：この字は荀子の字をむずかしくしてただけであるから発音は前の通りである。

蠍輪：園林より東での称とは、本草綱目に書いてある。侏儒と語転だと言うから、この場合にはクモには蛇の皮が浮ひ上ってきそうである。

ね公 齊人の人の呼称である。

集子(蟻子・蟻母) いすれも昔のアシタカアモにあててきた文字らしいか、記載を読んでみると、もっと外の壁のアモらしい。

壁鏡(壁鏡) これはヒラタケモを指すもので、ヒラタケモの仔尼菓の形からこの名が出来たものと沿う。この仔尼菓を支那では鏡餅にしたことが古書に出てている。

蚕吻(蚕附) これは蚕手と同一のクモにあてた文字であって、我國でアンダカクモにこれを当てはめたことがあったが誤である。

蠍虎(蠍虎、蠍行) この名はハニトリクモにあてた文字である。

蠍蝠(蠍蝠蟲・蠍蝠) いすれもトクタケモを掛したものいちがいないか、現在のどのトクタケモにあてたものであるか判明しない。我國ではこれをシクモにあてているのは誤りである。それは支那の書に吸ひ取ることとか書いてあるからである。

「虫の上に置かたり、虫の口を閉う」また「糞屎をこと頃ぬみかし、糞をその牛にひきまわし、牛と糞で巣をつくり、糞龜に巣」止まおしあげ、ハニトリの通りすぎるをうかがっており、もし通れば、たゞちにとじ坐してこれを捕食する。糞は赤茶と褐色をすれば、糞龜に置せるときには見分けさだかるらす」ということからトクタケモであることに、引然としている。

Ⅱ. マライ島、ラバラバ(luba laba) クモ全体を導き。クンパン(Kumbang)クモや昆蟲類の総称である。

クバク(Kumba)・コンバ(Kimba)・コバア(Koba)このいすれもクモにもちいられると言うことである。これがもしほんとうであるとすれば、日本や支那でのクモの統称と少しく似ている。同一語から出発しているのか否知れない。

東京蜘蛛談話会会誌

KISHIDAIA

No. 3 1969, 3

岸田久吉氏蔵書目録(真正蜘蛛類)

ここに掲げる図書は、当談話会で管理する。(リストはアルファベット順)

B. 別刷(その2)

1. 安念嘉一(1939) 富山県産蜘蛛類。(自刊)
2. 石野田辰夫(1958) トリノフンダマシ(*Cyrtarachne*)について 宮崎リンネ会報 15
3. ——(1959) クサグモ属3種の生態について *Acta Arach.*, Vol.16 No.2
4. ——(1966) 日本の動物分布区分線と日本産トタテグモの分布(自刊)
5. 石野田他(1967) ハエトリグモの生態 昆虫と自然 Vol.2 No.2
6. 景山純孝(1966) 山陰地方の真正蜘蛛類 第1報 松江市立教育研究所 研究集録
第3号
7. ——(1968) 隠岐島産真正蜘蛛類について(続報) 同上第5号
8. 片岡佐太郎(1963) 岩手県産真正蜘蛛類〔I〕 理科の研究
9. 片山寛之(1932) ジガバチモドキの造巣に関する考察(追補) MUSHI Vol.5
10. ——(1933) オホモンクロベッカウの蜘蛛狩に就いて・ハナダカバチモドキ
の獲物に就て *Trans. Kansai Ent. Soc.* No.4
11. 河合三郎(1939) ジョラウグモの産卵適営 台湾博物学会報 Vol.29 Nos.184/185
12. 荘嶋泉(1951) 見島産蜘蛛類目録 山口大学農学部学術報告 No.2
13. ——(1952) トリノフンダマシ *Cyrtarachne bufo* (Boes. et Str.) の網に就いて
Arach. News No.1
14. ——(1955) 渡瀬線を蜘蛛により考察する *Acta Arach.*, Vol.14 No.1
15. ——(1955) 鹿児島市城山の蜘蛛に就いて 鹿児島博物学会報 Vol.2 No.2
16. ——(1956) 大分県のクモ ATYPUS No.10
17. ——(1956) 宮崎県に於けるハタケグモ属の一種について 宮崎リンネ会報 14
18. ——(1958) 海岸に棲息するハエトリグモに就いて 同上 15

19. —— (1980) 農作物害虫の天敵としての蜘蛛の研究(Ⅰ) 九州大学農学部学芸雑誌
Vol.18 No.1
20. —— (1967) 天敵としてのクモの働き 昆虫と自然 Vol.2 No.2
21. Kishinouye,K., (1890) On the development of Araneina. J. Coll. Sci. Imper. Univ.
Tokyo, Vol.4
22. 小松 敏宏 (1936) 長野県産蜘蛛の研究 倍濃教育 第 595号
23. —— (1936) センセウグモ *Ero japonica* の習性 紀州動植物 Vol.3 No.1
24. —— (1936) ユカタヤマシログモの粘液射出に関する報告
Acta Arach., Vol.1 No.2
25. —— (1936) クロアリグモの習性 *Acta Arach.*, Vol.1 No.3
26. —— (1937) カネコトタテグモの戸蓋 理学界 Vol.35 No.4
27. —— (1937) スズキドクグモの観察記 *Acta Arach.*, Vol.2 No.1
28. —— (1937) タンバグモの会合に就いて *Acta Arach.*, Vol.2 No.2
29. —— (1937) 佐渡島産蜘蛛目録 *Acta Arach.*, Vol.2 No.3
30. —— (1937) カナコキグモの習性 *Acta Arach.*, Vol.2. No.4
31. —— (1938) 蜘蛛の教材研究 倍濃教育 昭和13年8月号
32. —— (1938-1940) ナカムラオニグモの丸網に就いて(上・中・3・4)
Acta Arach., Vol.3 No.3 -Vol.5 No.1
33. —— (1939) 触糸の作者; ヒラタグモ, ミヤグモ, エンマグモ属
Acta Arach., Vol.4 No.3
34. —— (1940) 龍河洞産蜘蛛五種に就いて *Acta Arach.*, Vol.5 No.3
35. —— (1951) 長野県洞穴産蜘蛛の観察 倍濃教育 第 773号
36. 南村 清二 (1935) 蜘蛛と寄生蜂 昆虫界 Vol.3 No.3
37. Morikawa,K., (1957) Terrestrial fauna of Kashima islets in the bay of Tanabe,
Wakayama prefecture. Publ. Seto Marine Biol. Labor.,
Vol.6 No.2
38. 仲辻 耕治 (1937) 帆篠島(北千島)産蜘蛛類の新属新種に就て 東京農業大学
農学報 Vol.1 No.1
39. 丹羽 錦 (1928) 子守りをする蜘蛛の話 JOCK講演集第13号
40. 奥村 多忠 (1912) 蜘蛛の糸・紡績器及其の腺に就て 動物学雑誌 Vol.24 No.290
41. Paik,K.Y., (1966) Korean Anaurobiidae of Genera *Amaurobius* and *Titanoeca*.
慶北大学校論文集 第十号
42. —— (1967) The Mimetidae (Araneae) of Korea. Kyungpook Univ.
Theses collection Vol.11
43. —— (1967) The spider fauna of Korea. Educational J. Vol.7.8
(Teachers coll., Kyungpook Univ.)

44. Paik,K.Y., and Nankung;J., (1967) Korean spiders of Genus Cybaeus (Araneae, Argyronetidae) 2. Korean J. zool. Vol.10 No.1
45. Saito, S., (1939) On the Spider from Tōhoku. Saito Ho-on kai Mus. Pesearch Bull. Vol.3
46. 関口 晃一 (1940) 山中湖及湖畔の動物相 (四) 真正蜘蛛類 (1) 博物学雑誌 Vol.38 No.68
47. —— (1941) 南洋産の蝶形類, 多足類管見 同上 Vol.38 No.72
48. 下諭名松栄 (1965) 沖縄島産真正クモ類目録資料 (自刊)
49. —— (1967) 琉球列島のクモ相について Biol.Mag.Okinawa Vol.4
50. 進士織平・小野折三郎 (1936) 岩手県産蜘蛛類の分布目録 斎藤報恩会時報 第30号
51. Suzuki,S., (1954) Cytological Studies in Spiders. III. Studies on the Chromosomes of Fifty-seven Species of Spiders Belonging to Seventeen Families, with General Considerations on Chromosomal Evolution. J. Sci. Hiroshima Univ. Series B, Div.1, Vol.15, Art.2.
52. Suzuki,S.,and Okada,A., (1950) A Study on the Chromosomes of a Spider, *Heteropoda venatoria*, with Special Reference to X_1 -, X_2 -and X_3 -Chromosomes. 同上 Series B, Div.1, Vol.11, Art.4.
53. 高島 春雄 (1940) 伊豆下田の蜘蛛一覧 博物学雑誌 Vol.38 No.69
54. 植村 利夫 (1936) 興味ある蜘蛛の習性 理科教育 Vol.5 No.7
55. 八木沼健夫 (1955) 日本に於ける蜘蛛学の沿革と現況 追手門学院研究論集第一号
56. —— (1956) 奈良県の蜘蛛 関西自然研究会会誌 第9号
57. —— (1956) A new species of marine spider Desis from Japan. Pabl. Seto Mar. Biol. Lab., Vol.5 No.3
58. —— (1959) 広島県比婆郡の真正蜘蛛類 (II) 比和科学博物館研究報告第2号
59. —— (1959) Three new spiders collected by the scientific expeditions of the Osaka Museum of Nat. Hist. Bull. Osaka Mus. Nat. Hist. No.11
60. —— (1959) クモの科の簡単な見分け方 Nature Study Vol.5 No.4
61. —— (1961) Spiders from the Tokara islands. Bull. Osaka Mus. Nat. Hist. No.13
62. —— (1962) 洞穴産の蜘蛛 同上 No.15
63. —— (1962) 大隅半島南部・高隈山・霧島山の蜘蛛 資源科学研究所彙報Nos.56-57
64. —— (1962) 秋吉台洞穴のアキヨシヒメグモ 山口県の自然 No.7
65. —— (1963) 秋吉台洞穴の真正蜘蛛類 Bull. Akiyoshi-dai Sci. Mus. No.2

66. —— (1963) カナエグモの一新種と分類学上の位置 大阪市立自然科学博物館研究
報告 No.16
67. —— (1964) 広島県産ガケジグモの新種 比和科学博物館研究報告 第7号
68. —— (1964) 丹沢山塊の真正蜘蛛類 丹沢大山学術調査報告書 神奈川県
69. —— (1964) 南西諸島のクモ 関西自然文化研究会報告 第一集
70. —— (1964) キムラグモ蜂須賀線を越える 同上
71. —— (1965) クモの紡績器官に関する諸問題 植賀安平氏喜寿祝賀記念文集
72. —— (1966) 山口県見島のクモ 山口県の自然 第15号
73. —— (1967) 日本産真正蜘蛛類の検討・追加ならびに7新種の記載
追手門学院大学紀要 1
74. 八木沼健夫・大野正男 (1967) 北海道沿岸島嶼の真正蜘蛛類 東洋大学紀要
教養課程編 (自然科学) 第8号
75. ——・—— (1967) 越後栗島の真正蜘蛛類 同上
76. ——・—— (1968) 新島・式根島・神津島の真正蜘蛛類 同上 第10号
77. 山口 鉄男 (1952) 九州の蜘蛛 (第一報) 長崎大学教養部 研究報告 Vol.1 No.2
78. 安松 京三 (1936) 蜘蛛を狩る蜂 自然界 Vol.6 No.1
79. 吉倉 真 (1941) 樺太産蜘蛛類黄金蜘蛛科生態と分類 樺太時報 第55号
80. —— (1952) Preliminary Note on the Development of the Liphistiid Spider,
Heptathela kimurai Kishida. J. Sci. Hiroshima Univ. Series B,
Div.1, Vol.13, Art.4
81. —— (1954) On the tracheae in a Liphistiid Spider, *Heptathela kimurai*.
Kumamoto J. Sci. Series B. No.3.
- 82.83.— (1954·55) Embryological studies on the Liphistiid Spider, *Heptathela
kimurai* Part I · II Kumamoto J. Sci. Series B. No.3·Vol.2
No.1
84. 渕浅 啓温 (1939) 蜘蛛類餌食記録 (I) Acta Arach., Vol.4 No.3

談話会ノートより

○第28回 1969年2月23日, 日曜日 13:00pm~18:00pm

於 萱嶋先生宅

出席者 萱嶋先生, 浜村氏, 新海氏, 小野氏, 大河内

○松本氏が昨日先生の所に訪ねられたとの事, 本日お会いできず残念であった。

○今年は浜村・松本・新海の3氏が卒業なされる。

浜村氏は農林省で広島方面へ行かれる様子。

松本氏は高校で若い人々の指導に当られる様子。

新海氏は家で家業を手伝いながら研究。

諸氏の御発展をお祈りします。

○浜村氏のマスター論文が本日の中心話題, さすがマスターだけあり, 立派な論文敬服しました。栃木県の Faunaと水田のクモの生態, 特にキバラドクグモを害虫天敵として利用する基礎研究である。水田でのキバラドクグモの定着力は良く, 年2化らしい。マスプロ化できれば有望である。いずれ, じっくり読ませていただけたら幸せである。

○クモの和名に関する話題

クスミハエトリグモ

ナリヒラグモ → ギボシヒメグモ

イマイズミグモ

ミヤケグモ

タンゴグモ → キハダカニグモ

マタイボグモ

いずれも岸田先生が使われた和名。現在の扱いはどうなっているであろうか?

○4月頃浜村氏の送別会として採集会を開く予定。

○KISHIDAIA の発行が遅れているが, 小生が創刊号を出す予定。

○築地先生から前回のカラー写真を送っていただく。有難うございました。

記 T. Ohkohji

次号の談話会ノートには高尾山採集会の際のクモ類目録を載せたいと思っておりますので, 採集されたクモのリストをお送り下さい。

新海

クモの名称 — 昔の名前今の名前 —

新 海 栄 一

1969年2月23日の第28回談話会の際には松本氏より出されておりました、昔使われていたクモの名称（和名、学名とも）が現在どのように扱われているか、という話題を中心になりましたので、今回から数回に分けて私の調べました結果を報告させていただきます。クモの和名の由来等につきましては八木沼先生が発表されておられますので（ATYPUS Nos.46/47 pp.43-46），ほとんどふれていません。なお調査に当って八木沼先生に種々御教示をいただきました。厚く御礼申し上げます。

○ 和名（左が旧名）

シロウズグモ→カタハリウズグモ・クロボシイソウロウグモ→アカイソウロウグモ・ジュズカケグモ→ヨツコブヒメグモ・ワキグロサラグモ→ヘリジロサラグモ・コアシナガグモ→ヤサガタアシナガグモ・セスジコモリグモ→ヒノマルコモリグモ・カヤクグリグモ→カリウドグモ→（？イホウイロハシリグモ）・エビグモモドキ→シャコグモ・タンバグモ→ガザミグモ・コキハダカニグモ→コカニグモ・コノハエビグモ→シロツバカニグモ・キリシマアズチグモ・マユタテアズチグモ→アズチグモ・ササノハハエトリ→アオオビハエトリ・ゴコウハエトリ→マガネアサヒハエトリ・イナズマシヤグモ→イナズマウラシマグモ・ユノハマゴミグモ→ヨツデゴミグモ・

○ 学名・和名ともに変更

Enoplognatha foliicola Doen. et Str. コノハヒメグモ→アシブトヒメグモ

Tyrolida pulcher Kishida コガネマル→ハンゲツオスナキグモ

Narihira dericata Kishida ナリヒラグモ→ギボシヒメグモ

Nusa dubia (Doen. et Str.) ヌサグモ→ヌサオニグモ

—— つづく ——

K I S H I D A I A No. 3

1969・4・20 印刷

1969・4・21 発行

発行所 東京蜘蛛談話会

東京都日野市豊田1896 萱鳴泉方

Tel. (0425) 81-7128 (〒191)

東京蜘蛛談話会

KISHIDAIA

No. 4

1969. 5

クモの称呼(続)

岸田久吉(遺稿)

要領 クモの産卵 - クモの卵 - クモの単為生殖 - 子グモの生活 - クモの社会生活 - 蜘糸の使命 - 蜘糸の性質及利用

クモの産卵 雄との性的交際を完了した雌のクモはやがて卵を産む。其卵の構造及卵から子グモが出て来るまでの変化は既に第2章に略記して置いた通りである。雄と交際しない雌も又産卵する。クモの産む卵の数は種類に依っても差異があるし又個体に依ってもちがう様である。例えば大形な元気そうな種類は小形な弱そうな種類よりも一般に多数の卵を産む。彼のアシダカグモ、キシダグモ、ハシリグモなどの類は2-3,000,1疋で産むのにフクログモ、コマチグモ、ワシグモ、ヘトリグモ、センセウグモでは非常に勘く200を超える事は先づ無いと云って可い位である。同一種に属するものでも個体によって生活の様子は全く同一では無く、其為健康も異なって居る故、産卵数が同じでない。例えば食物を適度(充分)に摂取した個体は生長する間に食物を充分取らなかったものよりも多数の卵を産む。此はオニグモ属コガネグモ属其他に就て諸学者が実験した所によつて疑を容れぬ。多くの卵を産む動物は多くの危険を有するもので生育中に横死する個体が多く出来ても種族を維持して行ける様に出来て居ると能く聞く所であるが之は通則であつて一々の場合にはあたらぬ事もある。

クモの卵のう 大多数のクモは産んだ卵を蜘蛛から特別に出した糸でのうを作つて其中に収容している。此のうを卵のう(Egg-bag, Egg-sac, Egg-cocoon, cocoon, Ovi-sac)と云う。此卵のうの事をまゆと云う人があり、イギリス語でもフランス語でも Cocoon と云う字を用いて居る書物もあるが自分は此詞の使用を望まない。此詞の使用を好まぬのに次の3理由がある。(1)吾等は と云えば昆虫が蛹化所として作る糸細工の事として居る。(2)外国语の Cocoon は殻と云う意味のものである上に幼虫の蛹化所又は休所に用いられるのが普通である。(3)コガネグモ、ワシグモ、カニグモ、ドクグモ、ハエトリグモの類にはまゆ状の住居を必ず作るのがあってそれをまゆと呼ぶ人がある故術語の使分けが出来なくなる。

雌の目にも卵のうと映するものにも種々の型がある。今茲に之を3類に帰する。第1は懸垂型と云う。之は網を張るクモに多く網又は其附近に懸垂させて置く様に出来て居る。キサフラウグモ(Argyrodes)の卵のうは球形で下に 状突起があり、上に長い柄があって世帯主の網又は附近の植物に着けてある。ヒメグモ(Theridion)のには種に依つてキサフラウグモのと同様なものがあり、又、オホヒメグモの卵の如く長卵形で柄が無く恰もスモモの種核に劈縫たるものがある。トリノンダマシ(第33図cd)の卵のうは2形で1つはキサフラウグモと似た形で大きいだけがちがう、他

の1つは卵室が上下に延びて居る。イセキグモ (*Ordgarius isekii K. Kishida*) はもと京都の井関尊二氏が丹後で発見したものであるが其卵のうはトリノフンダマシの単純な方の卵のう(第33図d)に似て居る。但球形部半分だけの赤道に限り12枚の小鑑を並べている点が珍しい。センセウグモのは全くキサフラフグモと同じ形である、其1種 *Ero furcata* Villers では卵のう1個の中に僅かに6個の卵があるだと云う。クサグモの網のあった辺を晩秋能く探せば反故紙細工の様なものが見付かる、それを切開くと廊下の様にトンネルが出来て居て、中央に大きな多角形の厚紙細工(第33-a)がある、之が卵のうであるがその隅からは太い糸が出て反故紙細工に連絡し風が吹いても卵のうはローリングラムプの如く余りひどくは動搖しない仕掛になって居る。網を張らぬクモであるがコマチグモ(*Chiracanthium*) は美しい黄金色の心状卵形の卵のうを作る、のうは粗い絲で出来て居り在中の卵や子グモは透いて見えるのが普通である、のうの上には格段に柄が無い、コガネグモの網を見ると折々淡緑色の扁平な多角形体が下がって居り其周囲に沢山の絲が来て網につないで居る(第33図e), 之は蓋(Cover) と底(Base)から出来て居る立派な卵のうで、中に卵を包んだ白い軟い絲がはいって居る。フナヲカコガネグモの卵のうは釣に使うふごそっくりで共栓状の蓋があり、中には円塔形に卵が集って、軟い多量の糸で吊されて居る、のうの外側には無数の吸付があって古い網糸又は木の枝草の葉などに着いて居るからひどく揺れる心配は無い様である。第2は定着型である、之は最も普通な型で、網を張るクモにも張らぬクモにも共に此型の卵のうが多い。オニグモ、ヤマシロオニグモ等のは模式的で(第33図h) 蓋と底から出来て居り殊に蓋の糸が粗い、中に卵を包んで居る軟い絲がある、オニグモの物などは人家のといを探せばいくらでも得られるし又成熟した雌を捕えて相当に余裕のある暗い箱の中に入れて置けば彼の扁平な圓座様の大きな卵を作らしめる事が出来る。デヨウグモはオニグモのと似た小形の圓座様卵を作る、但し色は白く美しいが蓋には発見されぬ様に種々の 埃などを附着する。ササグモの卵のう(第33図b) は路傍のか本類の葉に定着して居る、卵のうは真綿の様に白く且つ軟い厚き蓋と底が強く縫合して居る、中に丸い卵を容めて居る、蓋の上には薄い糸織物が大きく被えて卵を保護して居る。トタテグモ、デグモ、ヒラタグモ、クログモ(*Clubiona*)、ハナグモ(*Misumena tricuspidata* Fabricius)、カニグモ(スギカニグモ)、ハエトリグモ、ハグモ等もササグモに一寸似た卵のうのもので住居又は網に着けて置く、ハグモに似て遙かに異なる觀を呈するのはゴミグモ属の卵のうで多くは多数の卵のうを作つて其まるあみ上に一直線を描く様に並べて居る、殊にゴミグモは其の名の通り卵のうの間に食沢を掛けて居るので古来有名である。第3は運搬型であつて網を作らぬ遊牧性の種類に見る、其外網の不完全なのを作る種類にも多い。ドクグモ(*Lycosa*)の卵のう(第33図f) は蓋と底はモナカと云う菓子の様に重なって中に餡にあたる卵を入れて居る之を卵疣につけて運搬して居る。キシダグモ(*Pisaura*)、ハシリグモ(*Dolomedes*)、アシダカグモ(*Heteropoda*)、ヤマシログモ(*Scytodes*)、コガネグモ科の小形種等は蓋と底の区別がつかぬ丸い卵のうを作るが、之を口部で始終運んで居る。イウレイグモ(*Pholcus*) といって人家に多い種類では30個足らずの卵を糸でからめて、長径2.8mm 短径2mm位の塊として下がくのあたりに着けて持歩いて居る。先づ之などは運搬型の内で最も原始的な部類であろう。

以上卵のうを其形態と親の扱方の関係に依つて3型に分けてみたが何れの型にも可なり変化が多

い。今までに知れたので卵のうを作らぬクモと云うのがある、それはイノシシグモ(*Dysdera*)とかミヤグモ(*Ariadna*)とか云う種類で(J.H.Montgomery 1909) 住居は作るが卵のうは作らず単に1滴の唾液中に産卵する。

卵のうの中で卵がふ化して子グモとなる。オホヒメグモの卵のうを親のクモと離してガラス缶へ入れて置くと、天然の巣網にかかって居る卵のうからは子グモが外へ出て来るに拘らず缶の中の卵のうは青いカビが生える様になっても1匹の子グモも出て来ない。之を小刀で切開いて見ると乾いたクモの死児が沢山に在るのが常である。其處で天然の巣の卵のうを注意して居ると親グモが小さい孔を開けたものだけ子グモが出て來るのである(Kishida, 1908)。ハシリグモキシダグモでも又ドクグモ(Montgomery, 1909) 等でも親グモが卵のうを喰破ってやらねば子グモは接吻の風にあたる事が出来ぬ、併しショラウグモ、オニグモ等では子グモは蓋と底の縫合線の緩い所から出て来る。オホダテゴミグモと云うのは卵のうは兵士の薬品箱の様な形で樹皮に吊下って居る、巻蓋が枝を巻いている所が一方だけ少しく緩くなつていて其所から子グモが出て來る (K Kishida, 1915)。

クモの単性生殖 (Parthenogenesis)両性生殖の卵は確に(普通は) ふ化するが雄との性的交際を了らざる雌の生んだ卵がふ化するや如何、從来之に2様の答がある。Campbell氏(1883) Damin氏(1893)等一派は雄と交らぬ雌の産んだ卵も全部ふ化した故クモは単性生殖をも行うと云うている。併し Blackwall 氏(1845) Bajanckard 氏(1857) Bajbiani 氏(1873) モンゴメリ氏(1907) 及岸田(1912)等は若い雌を飼育して成熟させた所卵は産むがそれは 化する力が無く乾上つて了うのが常であった、故に或他の節足動物と異なつてクモでは単性生殖は望が無いと思って居る。

子グモの生活 ふ化した子グモは小時卵のう内で生活した其間に少く共1回脱皮をする。尋で卵のうから出て來るが出た当座は卵のうの附近に群集して居る、此時代を群集生活(regarious life)期と云う。コガネグモでは卵のうの附近にはそい多數の糸を紡出して、黒い塊を為して群

って居る。キシダグモ及ハシリグモでは親グモは其卵のうを可なり高い草や木の上に運び喰破ってやつた後、附近に自ら糸を沢山曳いてやり済めば其片端にしゃがんで居る。夏秋の交稻田を見ればユワウロハシリグモ(第36図)が稻葉の末に斯様な事をするのが見られる。モンゴメリ氏は北アメリカ産の *Pisaurina* と云うキシダグモ近似のクモに於ても斯様な事実を見たと云つて居る

此際キシダグモのものでは子グモも糸を出して親の手助をする。此群集生活期の特別な網を子の巣團(Nursery web, Progeny nest)と名付ける。ドクグモに於ては W. Wagner 氏 H. Fabre 氏 C. Warburton 氏等が書いた通り子グモは卵のうから出ると間もなく親グモの体上に登り、其皮膚に生えて居る毛に繩付いて却々離れない、併し親を捕らえるか或は親グモの背面を木片やピンセットや筆で撫でると黒く見える程登っていた子グモが一時に地上に散らばり危難が去れば子は再び親の体によじ登る、独立生活が出来るまで斯うして母体上に群集生活期の日を送るのである。ところが斯く多數の子を背負った母同志が出会い共食の大合戦が折々起る、すると子グモは敵味方の區別無く地上に下り戦闘の終るのを待つて勝利者の背上にまた候登つて行く、殺され食われた親の子も現在親の仇たる勝利者の体へ平気で取着き、勝利者も亦毫も復仇を恐れるの色無く酒々落々来るものは拒まずと云う体である、自分はウツキドクグモで此事際を数回実見する事が出来た。

群集生活期が終になると“蜘蛛の子が皆ちりぢりに生業かな”で子グモは慈母の膝下否背上住民

又は網などを辞して再び古巣に帰らず全く個体生活(Endividual life)期にはいる、或は高い所から糸を流して網を張るがあり、或は小虫を追うて自分の腕を楽しむと云う風に雄々しく独立の生活を立てる。普通独立又は単独(solitary)と云えば妻や子と一所に居ても他人の世話にならねが可いのであるから、厳密に云えた所が夫婦即ち1対の雌雄の同棲とが相互扶助とかを許容する。然るにクモの常の生活は独立とか単独とか云うよりも以上で助無き(helpless)全く孤独生活である、極端なるクモの此の個体生活は食肉性に因って起った不可避の結論である事は云うまでもない。

クモの社会生活 アリやミツバチは共同体(Community)を作り分業を営んで居て其個体相互の関係は頗る緊密なる程度のものであるから普通に共同生活(Communal life)と云うて居る。相互扶助相互の関係が此共同生活よりも低度、而も群集生活よりも高度なものを社会生活(Social life)と名付ける。クモの中にも社会生活をするのが現今5~6種類知れて居る。其中特に有名なのはヒカゲグモ属のもので1つはシンガポール産の *Uloborus raffrayi* E.Simon 今1つはベネズエラ産の *Uloborus republicanus* E.Simon である。クモと云えば誰でも個体生活をするものと定めて居る有様故特に此項を挿んで置く次第である。

蜘蛛の使命 第3章第4章及本章で記した如く其の網も其の道しるべも其住居も将来子を保護するための其の卵のうも殆ど蜘蛛から紡出する蜘蛛絲で作られたものである。網や糞や卵のうを作らぬ種類でも其住居にだけは多少なりと其絲を用いる所を見ると蜘蛛本来の使命ははじめ其住居を作るに在ったものである事は確かである(蜘蛛の使命に就ては種々異議があるが以上は著者の意見である。)

蜘蛛の性質及利用 日本や支那の様にカイコを飼育して絹絲を取る国ではクモの絲を利用してみようと云う様な考は一寸出て来ないけれ共エウロッパとかアメリカの様な所では今日でも絹絲は、(人造絹絲も出来蚕をやって居るに拘らず)甚だ不廉であるが、昔は殊に高貴で容易に手に入れる事が出来なかったから、何がな絹絲の代用品をと蜘蛛の目盛の目で探して居た、斯の如き時に際してどうしてクモの絲が注目されないである事が出来よう!果して注目される機が来た。1970年フランス人 M.Bon氏はオニグモ属の1種 *Araneus diadematus* C.Clerckの卵のうの絲から靴下と手袋を作り、世間の非常なる注目を促した。そのためイギリスの Royal Academy(王立学会)はR.A.FRe-aumur 氏(1710)に基調査を依嘱するに至った。レオーミュール氏の報告に次の如き記事がある、曰く“卵のうの絲は網絲に比べると18倍もの強さがあるけれ共カイコの絲の強さに比べれば1/5にも足らぬ。加之光沢が甚しく劣って居る。尚、飼育するのに共食いをする性質があるのみか人の与える飼料だけでは決して満足しない伝々、世人は蜘蛛絲が実用上には売値の無い物である事を固く信ずる様になった。

併し沢山杜撰な点があったから R.H.Termeyer 氏などに訂正反された。テルメール氏も靴下や財布を蜘蛛絲で作ったりした。第19世紀の中葉から又もや蜘蛛絲の研究が興りフランス人 A.Vinson 氏はマダガスカル産デヨラウグモ属1種 *Nephila madagascariensis* A.Vinson の網絲は清涼なる黄色を帯び、絲質も上等であると記した。同地で生れた一貴婦人は華麗な1揃の手袋を作り時のフランス女皇に献上したと云う。此デヨラウグモに就いては宣教師 R.P.Camboue氏 J.Falloux氏 A.C.Favier氏の研究が相尋で出て、今ではアンタナナリボ市に絲蜘蛛工場と云うのが出来て盛に絲を取って

居ると云う。北アメリカ合衆国産のデュラウグモ属1種 *Nephila cjavipes* Linnaeusは俗に Silk spiderと称せられて居るものであるが J.H.Jones氏(1859) B.S.Wilder 氏(1863)が研究して絲量や性質を明かにし工業上に応用し得る事を唱えて居る。日本産のと同一種のデュラウグモ(第29図)が支那にも産するが彼地でも既に絲質の研究が出来上って居る。

蜘蛛の性質が最も明かに研究されて居るのはデュラウグモ属だけである。今夫の有名なるドイツの化学者 B Fischer氏(1907)がマダガスカルデュラウグモで得た結果を抜萃しよう。(物理学的性質) 網絲は普通の絹絲の様で黄色が強く少しく橙色を帯びて居り、吸水性はあるが普通の絹絲の様に水に溶け易いLeim(質)を有って居ない。Fibroin(化学的性質) 全体が普通の絹絲の(絹絲素)と似て居るがグルタミン酸及チアミン酸の多量に含まれている点が彼と大にちがう。

次に参考の為めに氏が乾物より得た強酸の分解物を氏の 絲分析に於けるヒプロインと比較して表示して置く。

印刷	1969. 5.20	発行所	東京蜘蛛談話会	TEL 0425-81-7128
発行	1969. 5.21		東京都日野市豊田1896	萱 崎 泉

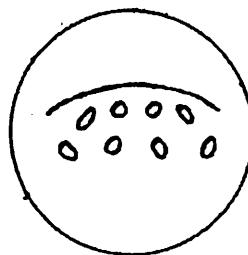
(復刻責任者注)

この報文には図の参照番号がありますが、図版はありません。また、本文中に文字の抜けている箇所があり、前後から推測して卵 は卵養、 化は孵化であることが判ります。そのほかもある程度何が入るか推測できますが、原稿で検討できなかったため、原本のままにしてあります。

東京蜘蛛談話会会誌

KISHIDAIA

No. 5



東京蜘蛛談話会

東京都日野市豊田1,896 萱嶋泉方

PHONE : 0425-81-7128

May, 1969

同名を持つ日本のクモとヨーロッパのクモ

八木沼 健夫

4月から5月に上京し、その機会に東京クモ談話会に出席し一言お話し申し上げたいと思っていたが、その機会がなさうなのでとりあえず一文を草してそれにかえさせていただく、会の発展をお喜び申し上げる意味で最近の話題を中心に感想なり希望を述べさせていただくことにした。

日本のクモを同定するとき、同じ旧北区に属する関係からヨーロッパの文献をまずたよりにするのがふつうである、しかし文献照合に際しての心理状態として、どれかに当てようという意識がはたらいたり、少々のちがいは地理的変異もしくは個体変異ぐらいに考えて度外視されがちである、また古い文献では詳しい記載がなかったり、生殖器官の図がないため、記述面のみではぴったり合うのが出て来る、こうしたことから時には全くちがった種に同定することがある。

日本の種でヨーロッパ種に同定されているクモはずい分あり、その大部分は正しいとしても、中には全くちがっている場合があるから同定する場合にも記録を見る際にも注意を要する、どの形質が種の標徴となり、どの形質が個体変異なのかを知るためにには多くの個体を調べて基礎的な力をつけておかなければならないし、記載文と図をていねいに見る必要がある。

筆者が最近手がけたアカオニグモも今改めて注意ぶかくヨーロッパの文献を見れば、Boesenberg (1901) や Wiegle (1931) の図はたしかに日本のものとちがっていることに気がつく、一見して特徴のはっきりしているものは往々にして細部の点まで注意しないのは誰にもあることである。アカオニグモは雄を必要としたが、待ち合わせが少ないため会員諸氏にお願いしたところ、新海栄一君をはじめ片岡佐太郎氏、竹田俊明氏のご好意で立派な標本を見ることができた、その結果は *Acta arachnol.* 22(1) に詳報の予定であるからここにはその結果だけを述べておく。日本のアカオニグモは満州やカラフトのものとともに *Araneus quadratus* とは全く別種であり、従来ダイダイオニグモに使用されていた *Araneus pinguis* に当るものである、従ってダイダイオニグモとアカオニグモは同種である。（従来赤い方をアカオニグモ、橙色のものをダイダイオニグモとされていたが形態的特徴は全く同じである）アカオニグモは個体により成熟度により、生息環境によって赤くないのがあり、これがダイダイオニグモとされていたのである。

このほか *Araneus bituberculatus* (ダンダラオニグモ) (注: 一時フジノオニグモとされたのは誤用、フジノオニグモなる和名を与えられたクモはキザハシオニグモであった。) や *Araneus omoedus* (コブオニグモ) も日本のものとヨーロッパのものとはちがっている、*A. bituberculatus* の方はヨーロッパ種に近似しており、広義には同種あるいは同亜種とできぬことはないが、*A. omoedus* に到っては全く別種である、日本の *A. omoedus* は大てい Boesenberg (1901) か Roever (1932) によって同定したものらしく、しかもそれは現在ヨーロッパでは疑問とされている記載で、*A. omoedus*

dusとして認められていない、ところが不思議なことにヨーロッパで疑問とされているこの異常型のものが日本にふつうにいることである。（このことはドイツの Grasshoff博士 もびっくりしている これはナイショ）。これらについては私はまだ日本の雌しか見ていないので何とも言えないが、ぜひ雄を見たいものである。ヨーロッパの両種の雌雄はすでに入手して、いま日本の雄の出現を待っている。（日本のクモ屋 今まで何をしていたのか？といわれても仕方がない）。

Araneus marmoreus（キバナオニグモ）はヨーロッパのものより大きいだけで、形態的な相異はないので安心したが、*A. displicatus*や*A. cucurbitinus*なども比較の必要はあると思う。単に腹背の対点の数だけできめてよいのだろうか？ 私も責められる一員ではあるが、それにしても、ものはや日本のクモ学はもう幼稚園時代は過ぎているはず。

*Araneus diadematus*はカラフト産一頭持っているだけであるが、斎藤氏の図説を見ても合わないし、植村氏は*A. diadematus*でないといわれる。しかし Wiehle の図とは同じものであり、岸田氏の同定にもとづく吉倉氏の標本をもらったのだから間違いないと思うが、なお今後検討を要する。

このような問題は早く解決されていなくてはならぬはずだのに、外国に対してはすかしいことがある。

日本のクモでヨーロッパ種に同定されたものがあることを欧米の学者が知ると、すぐさま標本を送れと言ってくる。もちろんこれによって日本のクモの名が正確になることはありがたいことではあるが、反面日本のクモを外国の学者にとやかく言われるのはシャクである。何も私一人の責任ではないのに何でもかでも私のところに質問が来て、いつも矢面に立たされるのはつらい。諸君大いに奮起して日本のクモはわれわれの手で究明しようではありませんか。最先端の学問にとびつくのも結構、新しい法則や事実の発見も貴重である。しかしそのまえにもっとも基本となる地味な分類の仕事をゆめゆめおろそかにしてはならない。幼稚園時代は去ったはずだのに、日本のクモ学の現状ではまだまだ分類学を批判する点にまで達していない。

高 尾 山 の ク モ

東京 クモ 談話会

1969年4月29日都下高尾山において東京クモ談話会の第3回採集会を行ないましたので、そのときの採集目録を発表しておきます。

採集コース ケーブル登り口（消流）から琵琶池まで。

参 加 者 荻嶋 泉、松本誠治、大河内哲二、小林久俊、国見裕久。

小林 勝、新海 明、田沢秀明、小野辰嗣、新海栄一

目 錄

1. *Antrodiaetus roretzi* (L. Koch)
2. *Ummidia fragaria* (Doenitz)
3. *Miagrammopes orientalis* Boes. et Str.
4. *Uloborus tokyoensis* Kishida

5. *U. varians* Boes. et Str.
6. *Ariadna lateralis* (Karsch)
7. *Pholcus crypticolens* Boes. et Str.
8. *Anelosimus crassipes* (Boes. et Str.)
9. *Ariamnes cylindrogaster* Simon
10. *Chryso venusta* (Yaginuma)
11. *C. punctifera* (Yaginuma)
12. *Episinus nubilus* Yaginuma
13. *Rhomphaea sagana* (Doen. et Str.)
14. *Theridion angulithorax* Boes. et Str.
15. *T. chikunii* Yaginuma
16. *T. latifolium* Yaginuma
17. *T. sterninotatum* Boes. et Str.
18. *T. tepidariorum* C. Koch
19. *Labulla contortipes* (Karsch)
20. *Linyphia albolumbata* Karsch
21. *Prolinyphia longipedella* (Boes. et Str.)
22. *P. marginata* (C. Koch)
23. *P. yunohamensis* (Boes. et Str.)
24. *Neolinyphia fusca* Oi
25. *N. japonica* Oi
26. *Strandella quadrimaculata* (Uyemura)
27. *Ero japonica* Boes. et Str.
28. *Araneus fuscocoloratus* Boes. et Str.
29. *A. uyemurai* Yaginuma
30. *A. ventricosus* (L. Koch)
31. *A. pentagrammicus* (Karsch)
32. *A. mitificus* (Simon)
33. *Neoscona scylla* (Karsch)
34. *Zilla astridae* (Strand)
35. *Z. sachalinensis* (Saito)
36. *Argiope minuta* Karsch
37. *Chorizopes nipponicus* Yaginuma
38. *Cyclosa octotuberculata* Karsch
39. *C. sedeculata* Karsch
40. *Meta yunohamensis* Boes. et Str.

41. *Leucauge subgemmea* Boes. et Str.
42. *Cybaeus nipponicus* (Uyemura)
43. *Cybaeus* sp.
44. *Agelena limbata* Thorell
45. *A. opulenta* L. Koch
46. *Coelotes exitialis* L. Koch
47. *Tegenaria corasides* Boes. et Str.
48. *Pisaura lama* Boes. et Str.
49. *Pardosa T-insignita* (Boes. et Str.)
50. *Pirata subpiraticus* (Boes. et Str.)
51. *Hahnia corticicola* Boes. et Str.
52. *Misumenops tricuspidatus* (Fabricius)
53. *Oxytate striatipes* L. Koch
54. *Philodromus auricomus* L. Koch
55. *P. spinitarsis* Simon
56. *P. subaureolus* Boes. et Str.
57. *Tearus piger* (Walckenaer)
58. *Boethus sexdentatus* Yaginuma
59. *Carrhotus detritus* Boes. et Str.
60. *Evarcha albaria* (L. Koch)
61. *Myrmarachne japonica* (Karsch)
62. *Chiracanthium japonicum* Boes. et Str.
63. *Heteropoda forcipata* (Karsch)
64. *Anahita fauna* Karsch
65. *Zelotes pallidipatellis* (Boes. et Str.)

高尾山の真正クモ類についてはいずれ総目録を発表する予定である。

K I S H I D A I A No.5

1969・5・30 印刷

1969・5・31 発行

発行所 東京クモ談話会

東京都日野市豊田1896 葦嶋泉方

TEL. (0425) 81-7128 〒191

K I S H I D A I A N o . 6

東京クモ談話会会誌

Oct. 20, 1969

川崎市王禪寺付近のクモ(Ⅰ)

新 海 栄 一

神奈川県の真正クモ類についての記録は、A.Mellotté が横浜において採集したマシラグモの一種を、E.Simon が1893年にヤマトマシラグモ (*L. japonica*)として記載発表したのが最初である。その後にも Boes. et Str.(1908), 植村(1936), 町田・松下(1940), 八木沼(1964), 近藤(1964), 国見(1967)の諸氏によりリストが発表されており、小報文も含めて現在までに神奈川県のクモに関する文献は10報前後あると考えられる。筆者は1967年4月より数回にわたり川崎市王禪寺付近に産するカネコトタゲモの生息状態を観察してきたが、同時にクモ相の調査も行ない1968年12月までに20科77種を確認できたのでここに簡単に報告しておく。

採集地域は王禪寺周辺400m以内及び原子力研究所内である。

目 錄

I ANTRODIAETIDAE

1. *Antrodiaetus roretzi* (L. Koch)

II ATYPIDAE

2. *Atypus karschi* Doenitz

III ULOBORIDAE

3. *Miagrammopes orientalis* Boes. et Str.

4. *Uloborus varians* Boes. et Str.

IV PHOLCIDAE

5. *Pholcus crypticolens* Boes. et Str.

V THERIDIIDAE

6. *Conopistha fur* (Boes. et Str.)

7. *Rhomphaea sagana* (Doen. et Str.)

8. *Theridion chikunii* Yaginuma

9. *T. japonicum* Boes. et Str.

10. *T. latifolium* Yaginuma

11. *T. octomaculatum* Boes. et Str.

12. *T. pinastri* L. Koch

13. *T. rapulum* Yaginuma

14. *T. tepidariorum* C. Koch

VI LINYPHIIDAE

15. *Linyphia albolimbata* Karsch16. *Prolinyphia longipedella* (Boes. et Str.)17. *Neolinypbia fusca* Oi18. *Strandella quadrimaculata* (Uyemura)

VII MICRYPHANTIDAE

19. *Erigone prominens* Boes. et Str.20. *Oedothorax insecticeps* Boes. et Str.

VIII MIMETIDAE

21. *Ero japonica* Boes. et Str.

IX ARGIOPIIDAE

22. *Acusilas coccineus* Simon23. *Araneus fuscocoloratus* Boes. et Str.24. *A. ventricosus* (L. Koch)25. *A. macacus* Uyemura26. *A. mitificus* (Simon)27. *A. abscissus* (Karsch)28. *A. ejusmodi* Boes. et Str.29. *Neoscona doenitzi* (Boes. et Str.)30. *N. mellotteei* (Simon)31. *N. scylloides* (Boes. et Str.)32. *Argiope bruennichii* (Scopoli)33. *A. minuta* Karsch34. *Chorizopes nipponicus* Yaginuma35. *Cyclosa argenteo-alba* Boes. et Str.36. *C. atrata* Boes. et Str.37. *C. octotuberculata* Karsch38. *C. sedeculata* Karsch39. *Larinia argiopiformis* Boes. et Str.40. *Nephila clavata* L. Koch

X THTRAGNATHIDAE

41. *Dyschiriognatha tenera* (Karsch)42. *Leucauge subblanda* Boes. et Str.43. *L. subgennea* Boes. et Str.44. *Tetragnatha praedonia* L. Koch

XI UROCTEIDAE

45. *Uroctea compactilis* L. Koch

XII AGELENIDAE

46. *Agelena limbata* Thorell

47. *A. opulenta* L. Koch

48. *Coelestes exitialis* L. Koch

49. *Coras insidiosus* (L. Koch)

50. *Tegenaria corasides* Boes. et Str.

XIII PISAURIDAE

51. *Dolomedes saganus* Boes. et Str.

52. *D. sulfureus* L. Koch

53. *Pisaura lama* Boes. et Str.

XIV LYCOSIDAE

54. *Lycosa coelestis* L. Koch

55. *Pardosa lugubris* (Walckenaer)

56. *P. T-insignita* (Boes. et Str.)

57. *Pirata subpiraticus* (Boes. et Str.)

XV OXYOPIDAE

58. *Oxyopes sertatus* L. Koch

XVI HAHNIIDAE

59. *Hahnia corticicola* Boes. et Str.

XVII THOMISIDAE

60. *Misumenops tricuspidatus* (Fabricius)

61. *Oxytate striatipes* L. Koch

62. *Philodromus spinitarsis* Simon

63. *P. subaureolus* Boes. et Str.

64. *Tmarus piger* (Walckenaer)

65. *Kysticus croceus* Fox

XVIII SALTICIDAE

66. *Carphotus detritus* Boes. et Str.

67. *Evarcha albaria* (L. Koch)

68. *Hasarius doenitzi* Karsch

69. *Harmochirus brachiatus* (Thorell)

70. *Jotus difficilis* Boes. et Str.

71. *Marpissa roemerii* Strand

72. *Menemerus pullus* (Karsch)

73. *Myrmarachne japonica* (Karsch)74. *Silerella vittata* (Karsch)

XIX CLUBIONIDAE

75. *Chiracanthium japonicum* Boes. et Str.76. *Clubiona vigil* Karsch

XX CTENIDAE

77. *Anahita fauna* Karsch

王禅寺付近のクモは以上の77種である。特に注目すべき種はなかったが、カネコトタテグモは相当の分布を示していると思われる。

尚神奈川県よりカネコトタテグモを最初に報じたのは山本源三郎氏であり、これは本種の雄の第一回目の記録である。現在では和歌山県より栃木県までの多数の県で採集され、それほど珍しい種類ではなくなったが、当時としては雌ですらたいへんな発見であった。

東京クモ談話会会員の採集によるカネコトタテグモの産地は下記の通りです。

津久井（松本・大河内・新海）：王禅寺（新海）：多摩プラーザ（国見）

大山（大河内・新海）：丹沢（松本・国見）：厚木（新海）

網 の 摄 影

松 本 誠 治

クモの採集をしていると生態写真が撮りたくなってくる。初めは無我夢中で撮りまくっているだけだが、少し余裕が出てくると生態をよりよく撮ろうと考えるようになって、クモ以外——すなわち、網、巣、卵のう——のものにも焦点を合わせようと努力します。しかし、クモの生態写真の撮影で、網の撮影は網を張って虫を捕えているクモにとっては「生活の場」であるだけに重要であり、又、その形が千差万別、同じ種類のクモの中でも、違った形の網を張ることもあるので、その証拠として写真にするのが一番確実であるがなかなか思うように撮れない。

最近、どうしても網の写真を鮮明にとらねばならないことがあって、いろいろ苦労したのだが、その結果「網の撮影」については多大な成果をあげることが出来る方法をみつけた。その前に、辻本修氏が ATYPUS No.11(1956) の中で網の撮り方について4条件を出していられるので紹介しておきたい。その条件とは、

- (A) バックは暗い所か、黒いものを選ぶこと。
- (B) バックは必ず相当ボカスこと
- (C) 逆光線か、斜光線の角度を選ぶこと、このためフードは少し深めのものを用意することが望ましい。しかし、逆光線だとクモそのものは黒くなってしまうので、あまりよい方法ではない。
- (D) 早朝、網に未だ露の残っている頃に撮影する。

であるが、撮影位置、明るさ、網の張ってある場所などで、困難を伴うことがある。勿論、辻本氏

が指摘した4条件を用いて自分もこれまで撮影を行なってきて、充分満足出来るものを撮影出来た。

自分はもっと簡単に、又、完全に網の形を出す方法として、エアゾル式のペイントを使用することを思いついた。白色ペイント1本あれば充分である。このエアゾル式白色ペイントを撮影する方向に向って、50cmぐらいのところから噴霧するのである。このようにすると、かなり細かい粒子が糸につくし、クモもどうにか逃げないでいる。（溶媒のにおいにはそんなに反応しなかった。）勿論、クモも白くなってしまうので、撮影方向から噴霧すると、いつも白いクモが写ることになるが、逆にすることで防げる。この方法だと、逆光あるいは斜光による網の一部欠損ということもなく、水滴によって糸がたるむこともない。短時間の噴霧で色をつけるのだから糸にその負担がかからないからである。又、水がこぼれるのを心配する必要もないから持ち運びに大変便利である。

残念ながら、欠点の方も多くあって改善の余地が多い。第一に、網だけでなく、まわりにも色をつけてしまうこと。第二に、第一を防ぐため近くで噴霧しようとすれば、噴射力が強くて網をこわしてしまうことである。これらは相反するものであるから、どちらかが改善されればよいのだが思うようにいかない。覆いか何かを網以外のところにおいてすればいいかもしれないが、ウズグモの網のように地面近くにあるものでは、オテアゲである。この点、水であれば網にだけ水滴がついであとはぬれるだけであるから何のことはないのだが。第三に、結果が全く人工的であること。これは辻本氏もいっているように、どうしようもない欠点である。完全円網が噴霧のしかたでこわれて、キレ網や無コシキ網と区別がつかなくなってしまったのはこまるが（自分ではこんなことはなかった），より改良された方法で網だけを色づけすることが出来れば、生態写真撮影の一方法となると思う。

後 記

第6号は3編来ておりましたが、タイプの故障で2編のみにさせていただきました。

松本氏の網の撮影法は、昔小松先生がハツリグモの網を撮影する際に使われた洗剤法をさらに一步すすめた新しい撮影法ですので、網の写真を撮る上でたいへん参考になると存じます。

K I S H I D A I A No.6

1969・10・18 印刷

1969・10・20 発行

発行所 東京クモ談話会

東京都日野市豊田1896 萱嶋 泉 方

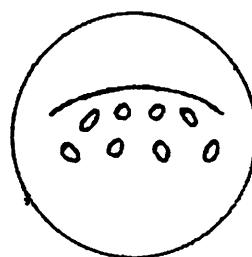
TEL. (0425) 81-7128

〒 191

東京蜘蛛談話会会誌

KISHIDAIA

No. 7



東京蜘蛛談話会

東京都日野市豊田1,896 萱嶋泉方

PHONE : 0425-81-7128

KISHIDAIA

No. 7

東京蜘蛛談話会会誌

October 1969

—文献

紹介—

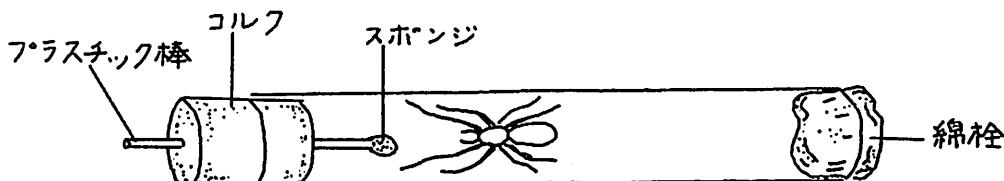
クモの人工飼料

大河内哲二

クモの飼育で一番苦労するのが餌に関する問題で、生きた小昆虫を与えなければならぬことである。ところが最近、この問題を解決するに有力な方法である人工飼料に関する報告を見たのでここに紹介する。出典は次の通りである。

William B. Peck and W.H. Whitcomb "FEEDING SPIDERS AN ARTIFICIAL DIET" ENTOMOLOGICAL NEWS Vol.79, No.9, pp.233-236, 1968

クモの人工飼料は多くの場合、餌として簡単に飼育できる生きた昆虫が使われてきた。この方法は費用や手数が多く必要とされた。クモに人工飼料を与える試みは *Chiracanthium inclusum* (Hentz) (コマチグモ属のクモ) で行われた。この淡い黄色のクモの腹部は透明な外皮なので腸内の食物の色が観察できた。例えば、このクモがメイガの幼虫を食べた後の腹部は緑色をしており、未熟なクモが赤目ショウジョウバエを食べた後のはピンク色になった。これらのクモの飼育は両端を綿栓で止めたガラス管で行われた。そして、ガラス管をいろいろな相対湿度の下に置いたところ、55%又はそれ以上に保たれたクモは、さし出された水を摂取しなかったが、これより低湿度で飼われたクモは敏速に動き、水のしづくや湿らせた綿の玉から水を摂取した。又、すりつぶした鱗翅目の幼虫、水、染色液の混合液 (homogenate*) は水の代用として後者のグループに与えられた。そして、この液が摂取されたことはクモの色の変化で確かめられた。初め混合液 (homogenate) を与え



* homogenate : 細胞・組織に緩衝液を加えすりつぶし、細胞内器官細胞内含有物を浮遊させた液で、生化学の研究に頻繁に使用される。ここでは昆虫・染色剤などを細かく均一にすりつぶし混合した液の意味で用いられている。

るのに液が針金の輪で容器の壁に置かれる方法が用いられたがうまくいかなかった。結局、最も成功した方法は図のように一方には綿栓をし、一方にはコルク栓の真中に中空のプラスチックの管を通して、内にスポンジをつけたもので栓をしたガラス管を用いるものであった。容器の内側のスポンジは長い針をつけた注入器で混合液（homogenate）を簡単にしめらせることができる。

数日間絶食させ、45%以下の湿度で飼育した *C. inclusum* はすぐスポンジから摂取した。最初に与えた時、個体の80%が1時間以内に腹部が染まり、24時間以内に全部が染まった。この方法は *Lycosa gulosa* Walckenaer などいくつかのクモや、成体や未成熟個体などでも行われ成功した。餌にすりつぶした昆虫の液（homogenized insects）が与えられたがこれは必須成分ではない。*C. inclusum* の20個体は卵黄4、染色液1を混合した餌を6週間与えられた。他の未熟な *L. gulosa* の20個体のグループでは、ホモミルク2、卵黄10、染色液1の餌で、多方90日間生きた。これらは新鮮な方が有効であった。この実験で、ほとんどの個体が1～数回脱皮した。しかし、この期間は長くなり、*L. gulosa* では同じ卵のうから出たコントロール（標準）の12個体が正常の12日であったのに28日かかった。

この実験によってクモは人工飼料を食べるため引きつけられ、種々の構成の餌を受け入れた。これによって未だに不明だった食性上、必要とされる成分が決定できるであろうと思われる。

クモの記事（1）

松本誠治

単行本中に掲載されているクモについて紹介してゆく

内田 亨 著
蜜蜂と花時計
昭和21年2月10日発行
北方出版社

クモに関する記事は「蟲の喧嘩」中にある。オニグモ・ハエトリグモ・ハナグモ・クサグモ・ジグモ・タナグモ・ハシリグモ・ドクグモ・トタテグモの名がみられる。クモがエサを捕らえるところ、クモ同士を戦わせたりしたことを先生が詳細な観察されている。

朝日新聞社編
身近な動物たち
昭和37年1月30日発行
朝日新聞社

「動物東京版」と題して新聞に連載されたもので34回に「クモ」がある。植村先生・関口先生の名前が出ている。副題は「時計より正確な日課」となっている。ベッコウバチに狩られること、クモの糸の利用が産業としては困難なことも書かれている。

クモの名称 (II) — 昔の名前・今の名前 —

新 海 栄 一

本誌No.3にはあまり知られていない和名及び学名のクモ20種について書きましたが、科の配列が不規則でしたので、今回から科別に記しておきたいと思います。（前回の分も含んでおります。）

リスト作成に当たっては全文を通して The Spider fauna of Japan (T. Yaginuma 1962) を参考しております。また不明の点は八木沼健夫・萱嶋泉両先生に御教示いただきました。厚く御礼申し上げます。

凡 例

1. 和名()内は旧名及び異名。以前使用されたことのある学名の前には = を付けた。ただし属が何回も変更になった種については、日本産蜘蛛類（岸田久吉 1913-1914）以後の属しか記していない。
2. 科の配列は原色日本蜘蛛類大図鑑 増補改訂版（八木沼健夫 1968）の日本産真正くも類分類表に従った。
3. 学名は1969年10月24日現在である。

HEPTATHELIDAE キムラグモ科

Heptathela kimurai (Kishida) キムラグモ (ハラフシグモ)
= *Liphistius Kimurai* Kishida

ANTRODIAETIDAE カネコトタテグモ科

= ACATTYMIIDAE (ヒラキドグモ科)

Antrodiaetus roretzi (L. Koch) カネコトタテグモ
(シナノトタテグモ・ヒラキドグモ・カネコグモ)
= *Acattyma roretzi* L. Koch
A. yesoensis (Uyemura) エゾトタテグモ
= *Acattyma yesoensis* Uyemura

CTENIZIDAE トタテグモ科

Ummidia fragaria (Doenitz) キノボリトタテグモ
= *Pachylomerus fragaria* Doenitz ツクシトタテグモ
= *P. granulosus* Kishida イワノエトタテグモ
= *P. doenitzi* (Kishida) カミガタトタテグモ
= *Conothela doenitzi* Kishida

(キトタテグモ)

Latouchia japonica Strand ミヤコジマタテグモ (ミヤコタテグモ)

L. typica (Kishida) キシノウエトタテグモ (トタテグモ)

= *Kishinouyeus typicus* Kishida

ATYPIDAE ジグモ科

Atypus karschi Doenitz ジグモ

(異名多く地方により異なる。フクログモ・ハラキリグモ他)

Calommata signatum Karsch ワスレナグモ

= *C. pumila* Kishida ヒメワスレナグモ

AMAUROBIIDAE ガケジグモ科

Tiatanoeca nipponica Yaginuma ヤマトガケジグモ

= *Boroamia psechroides* Kishida ポロアミグモ

(和名ポロアミグモは現在 *Psechrus torvas* O. P. Cambridge (台湾産)
に使用されている。)

DICTYNIDAE ハグモ科

Dictyna felis Boes. et Str. ネコハグモ (ツクシハグモ・ハグモ)

(従来本種は *D. maculosa* Karsch ハグモと同定されていたが、*D. maculosa* は全く別のクモで八木沼氏により *Lathys puta* (O. P. Cambridge) のシノニムとされたため、現在まで *L. m.* のシノニムとされていた *D. felis* が生きてきている。)

Lathys puta (O.P.Cambridge) キイロカレハグモ

= *Dictyna maculosa* Karsch ハグモ

= *Lathys novembris* Doen. et Str. ルリカレハグモ・シモヅキカレハグモ

= *L. ocellata* Boes. et Str. (サガカレハグモ)

= *L. orientaris* Boes. et Str. ヤマトカレハグモ・オトサガカレハグモ

L. annulata Boes. et Str. カレハグモ (クロシロカレハグモ)

L. punctosparsa Oi ナシジカレハグモ

= *Pagomys punctosparsa* (Oi)

= *Brommella p.* (Oi)

ULOBORIDAE ウズグモ科

Hypitiotes affinis Boes. et Str. オウギグモ (キュウシュウオウギグモ)

= *H. montanus* Kishida

Uloborus sybotides Boes. et Str. カタハリウズグモ

(シロウズグモ・カタハリヒカゲグモ)

U. varians Boes. et Str. ウズグモ (オオウズグモ)

= *U. dubius* Boes. et Str. コウズグモ

U. yesoensis (Saito) エゾウズグモ

= *Argyrodes yesoensis* Saito エゾイソウロウグモ

OECOBIIDAE チリグモ科

Oecobius annulipes (Lucas) チリグモ

= *O. nipponicus* Kishida ヤマトチリグモ

= *Tiroecobius nipponicus* (Kishida)

= *O. navus* Blackwall

SEGESTRIIDAE エンマグモ科

Ariadna lateralis (Karsch) ミヤグモ

= *A. orientalis* Doen. et Str. コミヤグモ

OONOPIDAE タマゴグモ科

Gamasomorpha karschi Boes. et Str. ケムリダニグモ

(ケブリダニグモ・ウスイロダニグモ)

Ischnothyreus narutomii (Nakatsudi) ナルトミダニグモ

= *Gamasomorpha narutomii* Nakatsudi

LEPTONETIDAE マシラグモ科

Leptoneta japonica Simon ヤマトマシラグモ (マシラグモ)

Masirana nippara Komatsu ニッパラヒナマシラグモ

(ニッパラマシラグモ)

SCYTODIDAE ヤマシログモ科

= SICARIIDAE (ヤリダマグモ科)

Scytodes thoracica (Latreille) ユカタヤマシログモ

(ユカタヤリダマグモ・ブチヤマシログモ)

S. nigrolineata (Simon) ヤマシログモ (ヤリダマグモ)

PHOLCIDAE ユウレイグモ科

Smelingopus pallidus (Blackwall) ユウレイグモモドキ

- = *S. elongatus* (Vinson)
- = *S. todai* Kishida トダグモ・トダユウレイグモモドキ
- = *S. kaishidai* Saito キシダユウレイグモモドキ
(ナガトダグモ)

THERIDIIDAE ヒメグモ科

- Achaearanea (?) asiatica* Boes. et Str. メダマグモ (チチグモ)
- Anelosimus crassipes* (Boes. et Str.) アシブトヒメグモ
 - = *Theridion higense* Does. et Str.
 - = *Enoplognatha foliicola* Doen. et Str. コノハヒメグモ
 - = *E. crassipes* Boes. et Str.
アシブトコノハヒメグモ・アシブトコノハグモ
(クサリヒメグモ)
- Ariamnes cylindrogaster* Simon オナガグモ (ヘビグモ)
- Comaroma nakahirai* (Yaginuma) メナシヒメグモ
 - = *Archerius nakahirai* Yaginuma
- Chrysso venusta* (Yaginuma) コガネヒメグモ
 - = *Argyria venusta* Yaginuma
 - = *Argyroaster venusta* (Yaginuma)
- C. punctifera* (Yaginuma) ホシミドリヒメグモ
 - = *Argyroaster punctifera* Yaginuma
- C. argyrodiformis* (Yaginuma) オダカグモ
 - = *Ariamnes argyrodiformis* Yaginuma
 - = *Topo a.* (Yaginuma)
- C. vesiculosus* (Simon) ヒシガタヒメグモ
 - = *Neotipa vesiculosus* Simon
- Conopistha bonadea* Karsch シロカネイソウロウグモ
 - = *Argyrodes bonadea* (Karsch)
- C. cylindrata* (Thorell) トビジロイソウロウグモ
 - = *A. cylindrata* Thorell ビルマイソウロウグモ
(ホソイソウロウグモ)
- C. fissifrons* (O.P.Cambridge) チリイソウロウグモ
 - = *A. fissifrons* O.P.Cambridge
(イソウロウグモ・セイロンイソウロウグモ)
- C. fur* (Boes. et Str.) フタオイソウロウグモ
 - = *A. fur* Boes. et Str. クラカケイソウロウグモ

C. miniacea (Doleschall) アカイソウロウグモ= *Theridium miniaceus* Doleschall= *A. miniaceus* (Doleschall)

(マレイイソウロウグモ・ユノハマイソウロウグモ・

クロボシイソウロウグモ)

—文 献
紹 介 —

BLACK WIDOW の生命表

G.B.DEEVEY and E.S.DEEVEY jr: A LIFE TABLE FOR THE BLACK WIDOW, Trans. of the Acad. of Arts and Sci., Vol.36, pp.115-134, 1945

Black Widow (*Latrodectus mactans* (Fabr.)) を後述の条件下で飼育し、その生命表を作成したのが図（原典中では Text-fig.1）である。その条件とは、*Drosophila*を初期の餌として、又、後に meal worm にかえて与えたこと、水は綿栓につけて与えたこと、温度及び湿度の調節は Browning (1941) と Jones (1941) の研究により、重要であると思われるが、装置上調節できなかったことである。正確なデータが出たクモの個体数は 158 個体であるが、雌雄の判別が可能になるまでに死亡したものがあるので、図のもととなったものは雄 45 個体、雌 82 個体である。この実験を考察すると、Black Widow と同じ型の生存曲線を持つ動物は、人・ハタネズミ (Vole = *Microtus agrestis*)・Flour Beetle (*Tribolium confusum*) であるが、これは種々の動物がいろいろな発育段階 — すなわち生存曲線の異なる点 — で生まれてくるので、その後の生存曲線の形はさまざまになるはずである。又、この図の雌雄の生存曲線の違いは、雌は中期以降、次第に死亡するので死亡速度は単一である。雄は大多数が急速に死亡するが、小数の生き残り個体は比較的後まで生存する。しかし、この違いが事実であるか、雄が多いことから起こった統計処理の結果によるものかはいま決定することはできない。

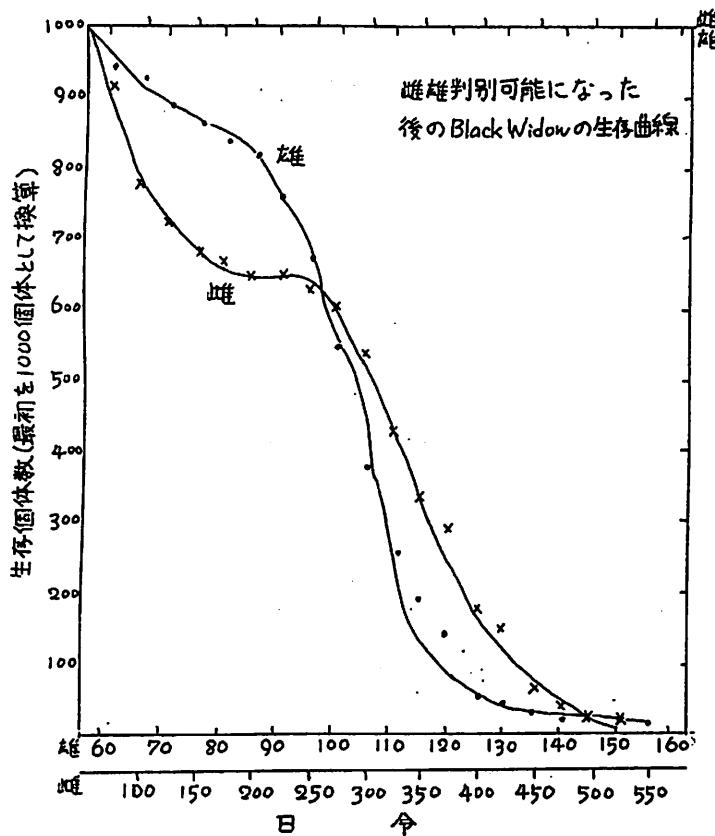
以上、本文を抜き書きしてきたが、以下要約を全文訳出しておく。

Black Widow (*Latrodectus mactans* (Fabr.)) を用いて 2 回の飼育実験（餌の供給は制御して、温度・湿度については調節していない）をして、死亡理由のはっきりしている 158 個体を得た。最初に利用できる生命表を人口統計から作成した。生存曲線 (lx) は比較的初期に著しく死亡するものが現れた。これは今までに人・ハタネズミそして Flour Beetle にのみ示されているめずらしい型と一致している。この表のもとになったものが、成熟前の脱皮を 1 回含んでいるから、もし生命表が誕生あるいは孵化のかわりにもっとさかのぼって受精から始まるなら、この曲線の型はより一般的になるだろう。

Black Widow の群生態はたぶん他の多くのクモも同様であろうが、2つの点で異例な興味がある。(1) 実験室内では、集団の各個体は隔離されて飼われているので、寿命は群集密度の影響をうけない。これは自然界でも、おおよそ同じであろう。(2) 雌雄では成熟日令及び寿命が大きく異なる

る。雄の平均成熟日令は卵のうから出た後 70.65 ± 1.84 日で、寿命は 100.32 ± 2.23 日であったが、雌では 92.17 ± 4.33 日で成熟し、 271.33 ± 20.9 日の寿命であった。実験中の総合生存日数 (Total life) は雄 160 日、雌 550 日であった。それ故、同じ親から同時に生まれた雌雄の間での交接はありそうにない。

(松本 誠治)



K I S H I D A I A N o . 7

1969・10・24 印刷

1969・10・25 発行

発行所 東京蜘蛛談話会

191 東京都日野市豊田1896 萱嶋泉方

TEL. (0425) 81-7128

キブネグモの記

岸田久吉（遺稿）

I. 前書き

筆者が、クモの研究を始めて間もない頃、洛北貨船山中に於て、全長5耗弱のやさしい小蜘蛛を探集した。長い間、フクロウクモ科のものとすること以上には、所属正明かに定められなかった。それで、新しい属種を代表するものとして、キブネグモ *Cibunea frontalis* の名を与えたのは、大正2年の夏である。その後も一向、このクモは採集されないし、その雄は相変わらず未知である。世の同好の注意を乞うために、再び、詳記を、此所に公けにする所以である。

II. 所属

キブネグモは、初回の発表には、シモン氏の体系によって、フクロウグモ科 Clubionidae, ウラシマグモ亜科 Liocraninae, ウラシマグモ群 Phrurolithae=Micariosomatae, としておいた。併し今日では、既に同好者御存知の如く、筆者式の体系によって、下記の如き位置となっている。

Familia	<i>Culubionidae</i>	-----	フクロウグモ科
Subfamilia	<i>Liocraninae</i> Simon	-----	ラシャグモ亜科
Tribus	<i>Ferrieriae</i> Kishida	-----	キブネグモ群
Genus	<i>Cibunea</i> Kishida 1912	-----	キブネグモ属

III. 検索

A. フクロウグモ科の亜科

A. 後疣稍節は、長大であって、少くとも、円錐状をしている。下顎前内縁の前半には、曲がった長毛後半には端直な短毛を担っている。

B. 下唇部は、長さ>幅である。

C. 気管気門の位置は尋常であって、後方にある。----- フクロウグモ亜科 Clubioninae

CC. 気管気門の位置は異常であって、前方にある。少くとも前疣から、かなり離れた前方にある。----- イヅツグモ亜科

BB. 下唇部は、長さ<幅である。気管気門の位置は、尋常であって、後方にある ----- ラシャグモ亜科 Liocraninae

AA. 後疣稍節は短小であって、殆ど丸いか、乃至は有るか、無いかわからぬ位である。下顎前内縁は前方だけに、長毛を担っている。

B. 下唇部は、長さ>幅である。

C. 背甲の形は尋常であって、卵形。全体がアリ状ではない。----- ネコグモ亜科 Trachelinae

CC. 背甲は狭長になり、そのため、全体は一見アリ状である。 -----

----- ミルメキウム亜科 Myrneciinae

BB. 下唇部は、長さ又幅である。

C. 前疣は尋常である。即ち、他疣よりも長くはないし、前方に離在してもいない。 -----

----- シヤグモ亜科 Curinninae

CC. 前疣は異常である。即ち、自倍頗る長いし、又、他疣よりも離れて、遠く前方にある。

----- ミアンドラ亜科 Myandrinae

B. ラシャグモ亜科の群

A. 歩脚の跗は、すべて毛束を有っている。

B. 第4脚の基節は、相触接している。

C. 直眼は、第1間眼よりも多少前位にある。

D. 間眼行は、外曲性である。 ----- イタチグモ群 Itatsincae

DD. 間眼行は、内曲性である。 ----- ミツルガ群 Miturgeae

CC. 直眼は、第1間眼よりも前位ではない。

D. 直眼は、第1間眼よりもいく分小さい。 ----- ラヅルヒウス群 Rdulphieae

DD. 直眼は、第1間眼よりも明かに大きい。 ----- シリスカ群 Syrisceae

BB. 第4脚の基節は、左右に広く離れている。

C. 背甲は中凸であって、卵形～長卵形をしているが、後方えは、別に伸びていない。

D. 直眼と第1間眼は先づ端直な線上にある。間眼行は内曲性である。 -----

----- キブネグモ群 Ferrieriaeae

DD. 直眼は、第1間眼よりも後位にある。

E. 間眼行は、外曲性である。 ----- セシエウテス群 Sesiateae

EE. 間眼行は、外曲性ではない。 ----- ウラシマグモ群 Phrurclitheae

CC. 背甲は低平であって、長楕円形をしており、前後両方へほそり、特に後方へはかなり長

く、柄状に突出している。間眼行は外曲性である。 ----- テウタムス群 Teutameae

AA. 第4脚の跗だけは、毛束を欠き、端爪は裸出している。

B. 直眼は、第1間眼よりも前位にある。

C. 間眼行は、外曲性である。 ----- ヒルケ群 Hilkeae

CC. 間眼行は、内曲性である。 ----- ラシャグモ群 Liocraneae

BB. 直眼は、第1間眼よりも前位ではない。

C. 直眼は、第1間眼と共に、端直線上にある。

D. 間眼行は、外曲性である。 ----- パラツス群 Parateae

DD. 間眼行は、外曲性ではない。 ----- ギタ群 Gytheae

CC. 直眼は、第1間眼よりも、後位にある。

D. 間眼行は、外曲性である。 ----- タンボグモ群 Agroecae

DD. 間眼行は、内曲性である。 ----- アポステスス群 Aposteneae

B. キブネグモ群の属

A. 直眼<第1間眼である。前列は端直である。中眼域は、長さ<幅。胸板は、長さ>幅である。

----- ヘリエイア属 *Ferrieria*

AA. 直眼ぐ第1間眼である。前列はいく分前曲性である。中眼域は、長さ ≈ 幅。胸板は、長さ ≈ 幅である。----- キブネグモ属 *Cibunea*

IV. 色 彩

- 1) 背甲 地は黄褐色であって、周縁と輻溝はいく分黒ずんでいる。全面をたてに3分して、中央の1/3又は、稍強が淡黒い条斑になっている。よく見ると、その黒斑は眼域をも含み、それよりも多少広いし、全体均質に塗られたものでない。
- 2) 頸 地は黄褐色である。短い黒横線があつて汚れている。
- 3) 胸板 淡い革黄色。前辺と側辺は暗褐色。
- 4) 下唇部 淡い革黄色。後方1/3位は黄褐色である。
- 5) 上顎 黄褐色。下面是他よりもいく分淡い。牙は他よりも濃いし、又、いく分赤ばんでいる。歯は赤褐色である。
- 6) 下顎 淡い褐黄色。前内線に沿う部は殆ど白い。
- 7) 触肢 全体に淡い褐黄色である。跗は多少濃い。爪は褐色である。
- 8) 歩脚 基、転2節は、淡い革黄色で、胸板位な色をしている。他は褐色、但し、跗は稍々淡い。刺は灰褐色、その砧は殆ど黒い。
- 9) 腹柄 上柄板は黄褐色。側縁は、赤ばんでいる。
- 10) 腹部 上面：地は淡い褐白色。前半には太い倒山の字形の紫黒斑、後半には4本の倒Vの字形のほそい紫黒斑と1本のほそい黒帯があること、V斑中、第1～第3は断続している。側面：一体に地は淡い褐白色であつて、疎らに毛眉状の白弧が透見される。又、殊疣区の前部は、赤紫黒色をしている。
下面：地は一面に淡い褐白色で、毛眉状の白弧を随所に透見すること、側面同様である。但し、殊疣前には、黒斑を欠いている。胃外域は濃褐色。
- 11) 殊疣と肛丘 先づ一様に、淡い褐黄色である。

V. 形 態

- 1) 背甲 全体は短い卵状心形。長さ>幅であるが、その差は小さい。全く不毛。滑沢である。側上では、頭部は短く、且つ狭い。中線上では、頭部は背甲の過半を占め、且つ前後同高である。胸部は全体低く、且つ緩かに両側に低くなっている。輻溝は、谷状で可なり判然たるものである。中窓は縱向であつて、長く、胸部（中線上）全長の前2/3を占めている。頸は短い。それでも、直眼の1直径よりは少し長い。
- 2) 眼域 頭部前方の幅の中央4/6を占めている。上から一見すると、前列<後列であり、両列共、弱く前曲性である。

- 3)直眼 円形，第1間眼と同一の端直線上にあるが，それよりもほんの僅かに大きい。直眼相互の間は，半径位である。
- 4)間眼 背甲上面観（前記）によって，先づ内曲性としているが，後列も全眼域として見ると，殆ど端直なのであるから，判然たるものではない。間眼列の広さの順位は，Ⅲ，Ⅰ，Ⅱである。間眼第1は，菱状卵形，第2は卵形，第3は短い楕円形である。各列で見ると間眼の間は $(I - II) > (II - III) > (I - III)$ であるが，その各の差は小さい。
- 5)中眼域 直眼といわゆる第2間眼とで，できている。長さ=幅，前辺<後辺，(直眼-第2間眼)<(第2間眼相互の間)である。
- 6)胸板 長さ>幅であるが，第2脚の基節後端が最広である。弱く中凸である。両側に4対の短溝が射出している。短広な側心状倒卵形である。前縁は広くて，波状を呈しており，中央と亜側部とに於て，前方へ丸く突きでており，殊に，中央突出は，最前方にでている。側縁は外曲性であるが，前半は殆ど並行し，後半は次第に相近寄る傾が強くなっている。基節に対する所には各1個の棘状肥厚がでている。後方は短く鋭形に伸出しているが，後端は鈍くて丸い。全体に毛が少いが，稍々長大なのは周縁近くに疎らに生じており，前縁近くは，他よりも稍々多い。
- 7)下唇部 胸板とは明かに離れている。長さ<幅である。全長の前方4/5は弱く中凸であって，先づ梯形をしており，明かに前辺<後辺である。稍多くの短毛があり，又，1対の長毛が両側縁の中央近くに生じている。前縁は微凹形であり，中線上に可なり深く切れ込んでいる。前方へ長毛を出しておき，殊に外位の2対は有歯長大である側縁は弱く外曲性である。後方1/5は低平であり且つ狭い。その前辺は後辺よりも明かに広く，その側縁は端直で後方に近寄るが，後辺は（殆ど端直）弱く前曲している。
- 8)上顎 牙溝は斜走し，外方に広く，内方に狭い。牙堤は内端近くに小齒を具へている。前牙堤では第1歯は小さく，第2歯は破格に大きい。後牙堤では5本の歯が見られるが，第1歯は明かに大きい（それでも，前牙堤の第2歯よりは，遙かに小さい）が，第2～第5，即ち外位のすべての歯はたしかに小さいし，且つ外の方へ次第に疎らに排列している。歯は短いが，岩乗であって，殊に基部2/3は太い。毒口は後面末端近くにあって，前曲したほそい卵形をしている。
- 9)下顎 殆ど平坦，短広であるし，且つ，長軸は前方で寄り，後方に開いている。各下顎は長さ3，幅2，前<後である。矩状楕円形といってよい。前縁は弱く前曲し，内半にはほそい長毛が前を指して林立し，外半には小鋸歯庇がある。内縁前半は殆ど端直であって，稍々短い毛が前内方を指して，多數，生じている。後半の後半は，切り型をつけて外方へえぐれており，その上更に強く硬化している。外縁は前方2/5で内曲し，他は外曲しているので，全体としては弱く波状なのである。後縁は後曲性であり，内方1/3は内前方に出ており，外方2/3は外前方に先っている。下顎は毛が多い方である。既記のものの外に，更に，刺状の長毛が，内半と周縁近くに，稍々多く生じている。
- 10)触肢 下顎の外縁上部の後半から，上外方にでている。歩脚上で，短小である。蹠は円柱状で

あるが、端は急に丸くほそっている。跗端には2歯性の小爪が（1本）ある。膝脛脛には毛も刺もある。跗は無刺性であるが、刺状毛は密生している。

- 11) 歩脚 基部の順位は、太さでは、第1脚、第2 = 第4脚、第3脚。長さでは、第1 = 第4脚、第2脚、第3脚である。腿～跗の5節について見ると、よく発達している。蹠跗の上段には、少數ながらも、長い触毛が生じている。刺は第1・第2脚に於て発達がよく、第1脚脛の下段に8対、蹠のに4対、第2脚脛に7対、蹠に3対の長刺を算へる。毛総は蹠と跗との下段末端近くに、僅かに見られる。毛束は、すべての跗端に判然認められる。
- 12) 腹柄 尋常に短い方である。上面では、中央に、短い半円形の前中板があり、その後部に前曲性の後縁をもった硬い底がついており、前縁の端直な長い後中板が、それに続いている。下面では、軟波上に、短広な丸菱形小硬板が、△状に寄っている。
- 13) 腹部 上面は長楕円状卵形であって、長さは幅の約2倍である。全面不毛・滑沢である。筋点も心臓型斑も見られない。側面も長楕円状卵形であるが、長さは高さの2.5倍位もある。やはり、全面不毛・滑沢である。下面は長楕円状をしており、中凸である。前方1/3には多くのほそい毛と、胃外域がある。胃外域は横の脣状半円形をしており、長さく幅である。その前縁は、△形、側縁は殆ど並行し、後縁は先づ後曲している。中線近く、後方3/5に、並行した2本の畝があり、外曲性のコンマ状肥厚がその外方に即いている。コンマの頭の内側に小孔、後方に大孔（即ち計2対の小孔）が開いている。後野は不毛性、但し、疣前には長毛群がある。
- 14) 雌疣 前疣は2節性。基節は大い円柱状体であって、互いに、寄っている。梢節は短くて、半球上である。後疣は前疣と同長に見えるが、本体は明かに、短く且つほそい。やはり2節性であって、基節は弱く後曲している。梢節は稍々長い円錐状であるが、硬化度が、はなはだ低い。
- 15) 肛丘 低い半球状体である。後上方から見ると、2節性で、その節間膜はよく発達している。梢節背面には長刺の櫛がある。

山梨県西湖付近のクモ

国見 裕久

1969年8月6日～9日まで、都立目黒高校生物部の合宿が山梨県西湖で行われた。私もOBとして参加し、わずかであるが、クモを採集することができたので、ここにリストとして報告する。

採集地は、西湖の西側の、標高約1,000mの根場から、紅葉台にかけてである。付近は、植物相がきわめて、単純であり、昆虫相も単純である。

採集は、荒畠正治、石井潔、高島孝典、国見裕久の共同採集である。最後に、同定に協力していただきました、新海栄一氏に深く感謝する次第である。なお、リストに次の二種を加える。

採集目録

1. <i>Theridion tepidariorum</i> C. Koch	オオヒメグモ
2. <i>T. japonicum</i> Boes. et Str.	ヒメグモ
3. <i>T. takayense</i> Saito	タカユヒメグモ
4. <i>T. lunatum</i> (Clerck)	カグヤヒメグモ
5. <i>Dipoena castrata</i> Boes. et Str.	ボカシミジングモ
6. <i>Episinus affinis</i> Boes. et Str.	ヒシガタグモ
7. <i>Linyphia longipedella</i> Boes. et Str.	アシナガサラグモ
8. <i>Araneus ventricosus</i> (L. Koch)	オニグモ
9. <i>A. uyemurai</i> Yaginuma	ヤマオニグモ
10. <i>A. pentagrammicus</i> (Karsch)	アオオニグモ
11. <i>Neoscona doenitzi</i> (Boes. et Str.)	ドヨウオニグモ
12. <i>N. scylloides</i> (Boes. et Str.)	サツマノミダマン
13. <i>Argiope bruennichii</i> (Scopoli)	ナガコガネグモ
14. <i>Cyclosa argenteo-alba</i> Boes. et Str.	ギンメッキゴミグモ
15. <i>Meta yunohanensis</i> Boes. et Str.	メガネドヨウグモ
16. <i>Leucauge magnifica</i> Yaginuma	オオシロカネグモ
17. <i>L. subgemmea</i> Boes. et Str.	キララシロカネグモ
18. <i>Pardosa T-insignita</i> (Boes. et Str.)	ウズキコモリグモ
19. <i>Oxyopes badius</i> Yaginuma	クリチャササグモ
20. <i>Agelena opulenta</i> L. Koch	コクサグモ
21. <i>Misumenops tricuspidatus</i> (Fabricius)	ハナグモ
22. <i>Tmarus piger</i> (Walckenaer)	トラフカニグモ
23. <i>Synaema globosum japonicum</i> Karsch	フノジグモ
24. <i>Diaeae dorsata</i> (Fabricius)	ギョウジャグモ
25. <i>Oxytate striatipes</i> L. Koch	ワカバグモ
26. <i>Hasarius doenitzi</i> Karsch	デーニッジハエトリ
27. <i>Zelotes asiaticus</i> (Boes. et Str.)	クロチャケムリグモ

KISHIDAIA No. 8

1969. 10. 30 印刷

1969. 10. 31 発行

発行所 東京クモ談話会

〒191 東京都日野市豊田1896 荘嶋 泉方

イソウロウグモ

大河内哲二

イソウロウグモ (*Conopistha*) は、その形態、色彩、習性がおもしろく、一般の人々は言うに及ばず、クモ屋の興味を引く、クモである。自ら網を張らず、他のクモの網にはいりこむ習性は、岸田久吉先生の命名したイソウロウグモの名にぴったりである。(ComstockやKastonによると、自ら網を張る能力はもっており、時折、小さな網を張るそうである。) 食性は網の主の食べ残りや、主の見向きもしない小さな虫を食べているらしい。オニグモやジョロウグモの網に蚊がたくさんついているのに当の主は知らぬ顔をしているのを良く見かけるが、あの蚊を食べるとすれば、実に合理的なクモである。

野外でイソウロウグモを見るのは、主から遠くにいる場合が多い。つまり、クサグモの網に居るチリイソウロウグモは網の上下に張られた糸の中に、スズミグモのドーム網では、同じくチリイソウロウグモが主より上部の糸の間に、オニグモ、ジョロウグモの円網では中心から離れた周辺部に、といった具合である。主のクモはイソウロウグモを食べないと言うものの、やはり大きなクモを警戒しているのであろうか、又は、大きなオニグモの網などで小さな昆虫がたくさんついて、もがいでいるのに、主が見向きもしない光景と同じく、主にとってイソウロウグモは、餌として認められないのかも知れない。又は網の清掃者として共生関係にあるのだろうか。おもしろい問題である。

日本産のイソウロウグモは、現在5種が記録されている。いずれも形態がおもしろく、しかも色彩が金属光沢を持った豪華なものが多い。

チリイソウロウグモ *C. fissifrons* はタナグモの網にはいりこんでいるのを良く見かける。筆者は、このクモを奄美大島で多数採集したが、いずれもスズミグモのドーム網に居候していた。しかも、関東付近の個体は、体長8mmほどの小さいものだが、奄美のものは15mmもあり、別種の感をいだかせる程である。これはドーム網に一匹づつという場合が多かった。しかもドーム網の上部にいた。このクモはタナ網もしくはドーム網様のものに居候するらしい。

シロカネイソウロウグモ *C. bonadea* は腹部が銀色に光り、三角形で小さいながら、実に美しいクモである。これは、オニグモ、アシナガグモ、ジョロウグモ又はヒメグモの網に居候する。奄美ではオオジョロウグモの網に、30余匹が居候しているのを見つけた。細野善熙著「蜘蛛の習性」にはジョロウグモが食事中の餌にこっそり近づき、一緒に食事する観察例がのっている。

アカイソウロウグモ *C. miniacea* も前種同様、三角形の腹部をしており、その頂点に黒色斑があり、全体朱色で、前種に劣らず美しいクモである。このクモも円網に居候し、ゴミグモ、オニグモ、コガネグモ、ジョロウグモの網にはいりこむ。筆者の奄美での記録では、シロカネイソウロウグモと一緒にオオジョロウグモの網に居候していた。

ところで、これまでイソウロウグモに関する図を見ると、その雄の図が少いようである。筆者は前3種の雄の標本を所有するが、腹部の形態、色彩、斑紋も雌に似ており、すぐ判別できるが、その眼域はヤリグモの雄やコサラグモと同様、突出隆起上やその基部にあり、突出隆起の形が種によ

って違っているので、これでも、同定できそうである。参考までに図を示しておく。尚、イソウロウグモの自ら張った網の記録を、お持ちの方は、お教えいただければ幸である。

図 片反 説明

1. Lateral view of *Conopistha bonadea* (♂) シロカネイソウロウグモ
2. Lateral view of *C. miniacea* (♂) アカイソウロウグモ
3. Lateral view of *C. fissifrons* (♂) チリイソウロウグモ

クモの寄生虫発見記

大河内 哲二

クモは肉食動物であるから、この存在を恐れる小動物も多いが、逆にクモが恐れる動物も少くない。直接クモを捕食する鳥、カエル、ムカデをはじめ、クモに卵を産みつけて、その幼虫の餌にする寄生蜂、ベッコウバチ、ジガバチ、そして体表に付着するダニ、又時には仲間のクモでさえ敵となる。時にヤリグモ、センショウグモは他のクモを襲う。ところで、もう一つ体内に寄生する線虫も見逃せない。

クモに寄生する線虫については八木沼健夫著の図鑑に *Mermis* の名が出ているが、岸田先生が、大正15年に書かれた「動物教材の根本的研究」の「くも」に *Mermis* がハグモに寄生している図がのっている。

筆者も友人が採集してくれた北海道のクモの中に線虫に寄生されたクモをみつけた。これが果して *Mermis* であるか否かは不明だが、その発見の時の様子を記してみたい。

寄生されていたのはドクグモの一種であったが、筆者の手にとどいた時は、ちょうど糸疣の付近から 1.6cmばかりひも状に外へ出ていた。色は淡褐色であった。採集者の話によると地面を歩行していたのを採集したのだが、別に“ひも”には気づかなかったとの事なので、おそらく、アルコール漬けにされ、苦しまぎれに脱出を試みたものと思われる。ちょうど糸疣の所から出ていたので、線虫とはわかりにくかった。頭微鏡下で良く見ると、どうもおかしい。そこでピンセットで少し引っぱてみると、白いひもの繞きが引き出されてくる。しばらくクモを表にしたり裏にしたりしていたが、岸田先生の例の図を思い出しさっそく見ると、その図に実に良く似ている。これは！というのでさっそく腹を開いてみた。ところが、普通クモを開剖すると、体液のためか一面濁ってしまい、しかも拡散しないのでまったくやりにくいのだが、今度ばかりはまったくそんな事はない。しかし腹の内部はいつもと違って“細いひも”的な球がはいっているだけだった。少くとも腹側にはクモの内臓と思われるものは何一つなかった。

そこで微針とマッチ棒で作った小型の柄付針で注意深くこのひもの球をほぐしていった。すると背側の表皮のすぐ下に一層、糸くずのようになった内臓がわずかに見つかった。これでは何の部分

であるかまったくわからず、よくこれで生きていたものだと感心させられた。とり出した線虫はアルコールの中にあったにしては柔かかったが、少しだつと白から淡褐色になった。

クモの体長は 10mm, 腹部は 6mm と小さなものだったが、その中にいた線虫は 2 匹で、計測してみると、直径は 1 mm, 長さは 10cm と 11cm のものであった。

談話会の席上この話をすると、萱嶋先生はササグモで、新海君はハナグモ、アシナガグモなどではり、この線虫らしきものを見つけられたとのことであった。徘徊性のクモのみならず、造網性のクモにも寄生するとなると、寄生の経路はどういったものなのであろうか。

Mermis の分類学上の位置

線形動物門 NEMATHELMINTHES

線虫綱 Nematoda

新線虫亜綱 Eunematoda

毛管目 Trichesyringata

メルミス亜目 Mermithata

メルミス科 Mermis

図版説明

5. Lycosidae sp. の腹部内の寄生虫

6. 系疣付近から脱出した寄生虫

各地のクモの同定記録

大河内哲二

・大昔産

May, 24th, 1969, T. Ohkohji leg.

1. *Theridion takayense* Saito
2. *T. octomaculatum* Boes. et Str.
3. *Chrysso venusta* (Yaginuma)
4. *C. punctifera* (Yaginuma)
5. *Enoplognatha margarita* Yaginuma
6. *Linyphia albolimbata* Karsch
7. *Araneus ventricosus* (L. Koch)
8. *A. abscissus* (Karsch)
9. *A. cucurbitinus* Clerck
10. *Neoscona scylla* (Karsch)
11. *Oxyopes sertatus* L. Koch
12. *Misumenops tricuspidatus* (Fabricius)
13. *Xysticus lateralis atrimaculatus* Boes. et Str.
14. *Tmarus piger* (Walckenaer)

15. *Synaema globosum japonicum* Karsch
16. *S. takashimai* (Uyemura)
17. *Oxytate striatipes* L. Koch
18. *Thanatus formicinus* (Clerck)
19. *Pistius truncatus* (Pallas)
20. *Philodromus auricomus* L. Koch
21. *Hasarius doenitzi* Karsch
22. *Carrihotus detritus* Boes. et Str.
23. *Silerella vittata* (Karsch)
24. *Myrmarachne japonica* (Karsch)
25. *Chiracanthium japonicum* Boes. et Str.
26. *Anyphepha ayshides* Yaginuma
27. *Micromata virescens* (Clerck)
28. *Kishidaia quadrimaculata* Yaginuma

◦ 神津島

May, 7th, 1969, T. Hanatani leg.

1. *Dipoena punctiparsa* Yaginuma
2. *Neoscona scylla* (Karsch)
3. *Larinia argiopiformis* Boes. et Str.
4. *Leucauge blanda* (L. Koch)
5. *Carrihotus detritus* Boes. et Str.
6. *Hismenops tricuspidatus* (Fabricius)
7. *Tibellus blongus* (Walckenaer)
8. *Chiracanthium eututtha* Boes. et Str.
9. *Philodromus subaureolus* Boes. et Str.

◦ 御前崎島

21st-25th, July, 1969, K. Sohma leg.

1. *Araneus subpullatus* Boes. et Str.
2. *Neoscona nautica* (L. Koch)
3. *Ariadna lateralis* (Karsch)
4. *Theridion tepidariorum* C. Koch
5. *Leucauge blanda* (L. Koch)
6. *Hismenops tricuspidatus* (Fabricius)
7. *Menemerus confusus* Boes. et Str.
8. *Rhene atrata* (Karsch)

◦ 三宅島

July, 16th-19th, 27th, Aug., 20th, 1969

K. Sohma leg.

1. *Theridion tepidariorum* C. Koch
2. *Araneus subpullatus* Boes. et Str.

3. *A. cucurbitinus* Clerck
4. *Gasteracantha kuhlii* C. Koch
5. *Argiope minuta* Karsch
6. *A. bruennichii* (Scopoli)
7. *Neoscona nautica* (L. Koch)
8. *Cyclosa argenteo-alba* Boes. et Str.
9. *Leucauge blanda* (L. Koch)
10. *L. magnifica* Yaginuma
11. *Pardosa T-insignita* (Boes. et Str.)
12. *Pirata piraticus* (Clerck)
13. *Hismenops tricuspidatus* (Fabricius)
14. *Rhene atrata* (Karsch)
15. *Jotus difficilis* Boes. et Str.
16. *Evarcha albaria* (L. Koch)
17. *Myrmarachne japonica* (Karsch)
18. *Xysticus croceus* Fox
19. *X. saganus* Boes. et Str.
20. *Anyphaena pugil* Karsch
21. *Clubiona jucunda* (Karsch)

• 大菩薩のクモ追加

May, 18th, 1967, T. Ohkohji leg.

29. *Uloborus sybotides* Boes. et Str.
30. *Enoplognatha margarita* Yaginuma
31. *Prolinyphia marginata* (C. Koch)
32. *P. yunohamensis* (Boes. et Str.)
33. *Strandella quadrimaculatus* (Uyemura)
34. *Araneus displicatus* (Hentz)
35. *Zilla sachalinensis* (Saito)
36. *Cyclosa ginnaga* Yaginuma
37. *C. sedeculata* Karsch
38. *C. argenteo-alba* Boes. et Str.
39. *Dolomedes sulfureus* L. Koch
40. *Pisaura strandi* Kishida
41. *P. lama* Boes. et Str.
42. *Pardosa T-insignita* (Boes. et Str.)
43. *Coelotes micado* Strand
44. *Tegenaria corasides* Boes. et Str.

45. *Xysticus croceus* Fox
 46. *Jotus abnormis* Boes. et Str.
 47. *J. difficilis* Boes. et Str.
 48. *Marpissa roemerii* Strand
 49. *M. magister* (Karsch)

○御戸戸島のクモ追加

Oct., 22nd, 1969, K. Sohma leg.

9. *Calommata signatus* Karsch ♂, ♀
 10. *Steatoda albilunata* (Saito)
 11. *Meta yunohamensis* Boes. et Str.
 12. *Cyclosa insulana* (Costa)
 13. *Lycosa pseudoannulata* (Boes. et Str.)

ハンゲツオスナキグモの幼生の斑紋について

大河内哲二・新海栄一

筆者の一人、大河内は1967年8月末に熊本県市房ダム付近の石垣において、カガリグモ属 *Steatoda*の網と思われる不規則網を多数発見し、網の奥の石のすき間にいたクモを探集した。このクモはその後 *Steatoda*であることは確認したが、斎藤氏の図鑑に出ているハンゲツオスナキグモ *S. albilunata* (Saito) と似ているものの、亜成体であったため sp.としておいた。ところが、今年新海が、これとまったく同じクモを東京都下武藏岩井で採集し、飼育したところ、成体となると斑紋、色彩が変化し、八木沼氏の図鑑に出ているハンゲツオスナキグモと同じ斑紋になった。これでハンゲツオスナキグモは幼生と成体で斑紋が変化することが判明した。この幼生の腹部斑紋は図に示したように白斑が前縁だけでなく、両側及び中央を2本横切り、さらに縦中央に点状にある個体もあった。体全体は黒色で、斑紋は白色、成体に見られる黄味、脚腿節の赤味もまったくなかった。

Boes.とStr.の *Japanische Spinnen* のp.154,Taf.5には *Lithyphantes cavernicola* ツリガネグモの記載と図があるが、ツリガネ状の卵のうを作ること以外はハンゲツオスナキグモの幼生と一致し、同一種ではないかとの見方もでている。

図 片反 記録 明 4. Abdomen of *Steatoda albilunata* (Saito), Young

KISHIDAIA No. 9

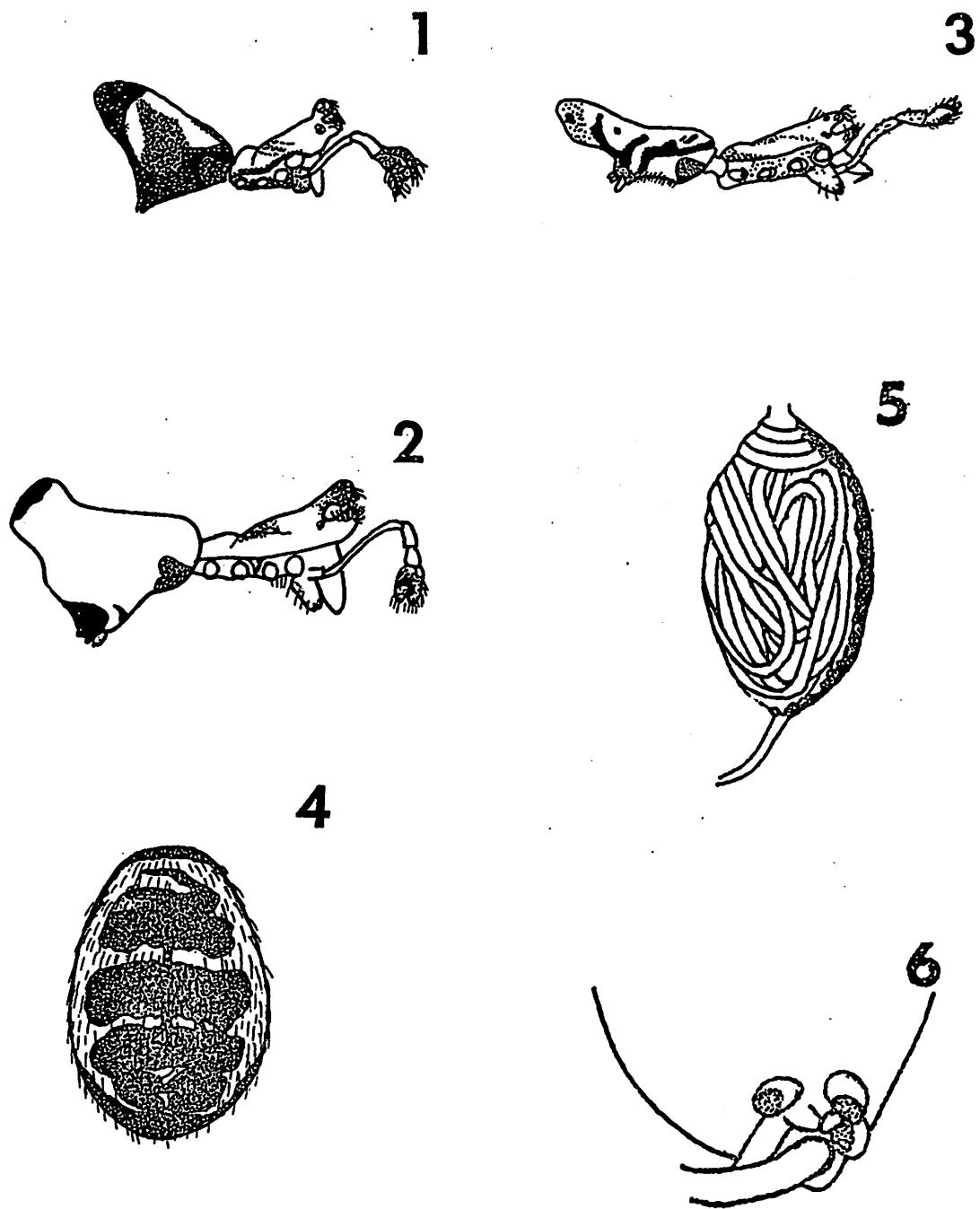
印刷 1969年11月4日

発行所 東京蜘蛛談話会

発行 1969年11月5日

東京都日野市豊田1896(〒191)

萱嶋 泉方



KISHIDAIA

No.10 1969. 11. 20

シナノトタテグモ (岸田久吉新称)
(カネコトタテグモ)

岸 田 久 吉
(大正七年十二月)

いまだ学名は不明なるも珍らしきクモの発見されたれば、ここに微細なる記載をし、予備報告をするものなり。

(カネコ)
和名 シナノトタテグモ (岸田久吉新称)

基本標品 ♀ 1個 信濃国上伊那郡南向村の産 大正7(1918)年8月金子光司氏採集、現に同氏の手許に保管せらる。

測定 全長12.0mm、背甲の長さ500mm、同じく幅4.5mm、腹部の長さ6.0mm、同じく幅4.5mm、上顎及蜘蛛をも加へたる大体の全長は14.5mm

	全 長	腿	膝+脛	膝	脛	蹠+附	蹠	附
触 髮	8.7mm	3.0mm	4.0mm	1.9mm	2.1mm	— mm	— mm	1.7mm
I 歩脚	12.2	4.0	4.5	2.0	2.5	3.7	2.0	1.7
II 歩脚	10.5	3.0	4.0	1.9	2.1	3.5	2.0	1.5
III 歩脚	10.3	3.1	3.5	2.0	1.5	3.7	2.2	1.5
IV 歩脚	12.3	3.5	4.3	2.1	2.2	4.5	3.0	1.5

形状 背甲は楕円状卵形、前端は後端よりも広し。中窓は中央よりも後方(後²)に在り楕円形の凹所の中に存し縦走せり。放射溝は4対ありて皆深し、前方の2対は各側に於て互に

KISHIDAIA

No. 10 1969. 11. 20

シナノトタテグモ (岸田久吉新称)
 (カネコトタテグモ)

岸田久吉

(大正七年十二月)

いまだ学名は不明なるも珍らしきクモの発見されたれば、ここに微細なる記載をし、予備報告をするものなり。

(カネコ)
 和名 シナノトタテグモ (岸田久吉新称)

基本標品 ♀ 1個 信濃国上伊奈郡南向村の産 大正7(1918)年8月金子光司氏採集、現に同氏の手許に保管せらる。

測定 全長12.0mm, 背甲の長さ 500mm, 同じく幅 4.5mm, 腹部の長さ 6.0mm, 同じく幅 4.5mm, 上顎及び卵疣をも加へたる大体の全長は14.5mm

	全長	腿	膝+脛	膝	脛	蹠+附	蹠	附
触鬚	8.7mm	3.0mm	4.0mm	1.9mm	2.1mm	— mm	— mm	1.7mm
I 歩脚	12.2	4.0	4.5	2.0	2.5	3.7	2.0	1.7
II 歩脚	10.5	3.0	4.0	1.9	2.1	3.5	2.0	1.5
III 歩脚	10.3	3.1	3.5	2.0	1.5	3.7	2.2	1.5
IV 歩脚	12.3	3.5	4.3	2.1	2.2	4.5	3.0	1.5

形状 背甲は楕円状卵形、前端は後端よりも広し。中窓は中央よりも後方(後2/5)に在り楕円形の凹所の中に存し縦走せり。放射溝は4対ありて皆深し、前方の2対は各側に於て互に近よる。頭部は半円形を呈し眼域の直後に高くそれより4方に低下せり。眼域は前斜面に在り其の前方は直ちに頭部の前端なるを以て別に額と称すへき部分を見ず。又同一斜面中の他部より隆起すれ共 pachylomerus等の如く眼丘の外境を確定する事無し(中眼の前端を連続する直線は側眼の中心を連絡する直線より後方に在り、眼域の幅は頭部の前縁の1/5を占む。前眼列は後曲、各眼の後端を連結する線も僅か乍ら確かに後曲也。前列中眼は眼域の中央を占め全眼の中最小にして円形を呈す。中眼間は其直径の1.5倍あり、中側両眼間は中眼の1直径より僅かに広し。後列は前曲、中眼の中心を

連結する直線は側眼の中心を連結する直線よりも僅かに前方に在り，中眼は針状倒卵形，側眼よりも少し且つ他の眼と異り台を有せず中眼間は前列中眼間よりも広く前列中眼の直径の4倍あり，之に反し中側眼間は甚だ狭く前列中眼直径の1/2に及ばず。中眼域は梯形，前辺は後辺よりも狭く1/2位あるのみ，其の長さは前辺の2/3位あり，両列中眼間は前列中眼の1直径よりも僅かに狭しされ共後列中側眼間の2倍に當る。両列側眼間は前列中眼の1直径に等しく両列中眼間よりも広くして前列中側眼間よりも僅かに狭し。眼域の後方中線上の前半に5体の稍太き毛を見る。其他眼域附近には短毛あるも他に毛少し。背甲の後側縁には僅かに様取らんとするの傾あり並に長きの数の黒毛を見る。

上顎は太くして短し上面基部には縫あり，先端の針毛の棘列は3分し中央部は10棘，内下部は1棘，外部は7本の過かにほそき棘より成る。次の列は7棘，次に6棘群生せり，牙を容る溝の外堤には長毛あるのみ，内堤には10本の歯あり中央の4本は大形也，牙の基部に近き3本は著しく其軸の外部を指せるを似て往々見落さる事あるべし，殊に最もれきものは甚微細なり。

下顎は明かに在し長し多数の刺状毛を生せり，決して棘を見る事無し。

下唇は梯形，前縁は後縁よりも狭し，長さは幅（後方に広き）に少しく劣る。前後両端共に丸し（鈍形）中凸平滑，但し前縁に限り少數の長き刺状毛を生せり，棘を有せず。胸板は円状卵形，長さは幅よりも僅かに大也。最広部は第2第3両脚の基節間に在り，前端は僅かに凹む。中凸，第4歩脚の基節は後端を押進むが如し，印刻は第2歩脚基節に対せるもの及第3第4両脚の基節に対せるものの明か也。毛は周辺に多く且つ少しく太く刺状となれるを見る。

肢の基節は下顎第1及第4歩脚のものは共に殆ど同長，次は第2脚のものの順にして第3脚のもの最も短し。歩脚基節の毛は一体に長く且し刺状也。

触繋，腿節は上稜一面及前内側下部に刺状毛を有す。膝節前内側中央にはほそき1本の刺あり外側には刺を見ず。脛節内側には9本外側下部には7本の刺あり。附節内側には8本外側には5本の刺を見る。末端の爪は一見単純なるが如き甚しく微細なる少く共3個の歯を有せり。

第1脚の腿節は上下両稜及其近所に長短諸種の毛を有す。膝節も毛あるのみ。脛節下稜の外側に近き所に4本の刺あり，其他は毛のみなるも上稜の毛の内には小数刺状のものを混ず。脛節内側下稜近くに8本下稜の外側近くに7本下稜末端に小き2本の刺あり。附節の刺は内側に小き1本あるのみ。内上爪に4歯基部のもの程大形也，外上爪に3歯あり下爪には歯無し。

第2脚以下の武装は第1脚に比して異なる点のみを記す。膝節の上下の稜には各2本の曲り且長き毛状の刺あり，脛節内側に4本下稜の外側近くに又4本の刺あり上稜の毛の内には著しく大形なる刺状毛あり，膝節下稜の外側近くに6本下稜末端に小き2本内側に9本（内2本は下方基部に近し）の刺あり。附節には全く刺無し。内上爪に5歯外上爪に4歯あり。

第3節の膝節上稜より内外両側（主として内側に近く）の上部に亘り22本の毛状刺あり。脛節も上稜より内外両側の上部殊に主として内側に近く30本位の毛状刺密生せり。此外外側の末端に近く1本の強刺あり下稜には少數の刺状毛があるのみ。脛節前外側上部に4本末端に1本其下方に束を為して纖小なる3本はなれて又1本下部に2本の刺あり後内側上部に3本末端下部に束を為して5本下部に3本下稜末端に束をなして纖小なる3本の刺あり附節は無刺にして上爪は各4歯を有す。

第4脚、膝節前外側上部に3本の刺あり其他上稜に太き刺状毛多し脛節前外側上部より上稜並に後内側上部に亘り13本末端に1本下部に3本の棘あり、後内側末端近くに1刺あり、蹠節前外側上部に4本末端に2本其下方に束を存して繊小なる3本下稜末端に1本後内側上部に3本末端下部に束を為して繊小なる7本離れて同様の1本の刺あり、附節は無刺上爪の歯は第3脚のに同じ。

日本帝国産原始蜘蛛類に就いて

岸 田 久 吉

(昭和二年十月)

日本帝国の版図内の原疣類及古疣類の蜘蛛は次表の通り、6科11属24種知られて居る。

キムラグモ科

- (1) *Heptathela kimurai* Kishida, 1923. キムラグモ 九州 種子島 奄美大島 沖縄島
カネコトタテグモ科

- (2) *Acattya roretzi* Koch, 1877. カネコトタテグモ 本州中部
トタテグモ科

- (3) *Kishinonyxus typicus* Kishida, 1909. トタテグモ (一名キシノウエトタテグモ) 関東
から九州まで

- (4) *Latouchia okumurai* Kishida, 1921. オクムラトタテグモ 九州南部

- (5) *Latouchia swinhonis* Pocock, 1901. オキナハトタテグモ 沖縄島

- (6) *Latouchia japonica* Strand, 1910. ミヤコシマトタテグモ 宮古島

- (7) *Latouchia formosensis* Kishida, 1926. タイワントタテグモ 台湾

- (8) *Pachylomerus mirundus* Kishida, 1919. チチシマトタテグモ 小笠原父島

- (9) *Pachylomerus granulosus* Kishida, 1920. ハノエトタテグモ 本州中部

- (10) *Pachylomerus midzusawai* Kishida, 1919. ミズサハトタテグモ 京都附近

- (11) *Pachylomerus doenitzi* Kishida, 1909. カミガタトタテグモ 本州中部 近畿

- (12) *Pachylomerus nawai* Kishida, 1919. ナワトタテグモ 本州中部 中国

- (13) *Pachylomerus fragariae* Doenitz, 1889. ソクシトタテグモ 九州北部

- (14) *Pachylomerus tsushimaensis* Kishida, 1926. ツシマトタテグモ 対馬

ジャウゴグモ科

- (15) *Macrothele ornata* Kishida, 1928. ヤエヤマジャウゴグモ

- (16) *Macrothele makii* Kishida, 1926. マキジャウゴグモ

- (17) *Macrothele holsti* Pocock, 1901. ジャウゴグモ (一名タイワントタテグモ) 台湾中部
及南部

チグモ科

- (18) *Atypus karschi* Doenitz, 1887. チグモ
 (19) *Atypus formosensis* Kishida, 1923. タイワンチグモ
 (20) *Calommata pumila* Kishida, 1914. ヒメワスレナグモ
 (21) *Calommata signata* Karsch, 1879. ワスレナグモ

バリケルス科

- (22) *Idiomma sp.* パラオグモ
 トリグモ科
 (23) *Yania vatasei* Kishida, 1920. ワタセグモ 紅頭山興
 (24) *Ischnocoella senftti* Strand, 1907. サイパングモ

キムラグモ属 *Heptathela* Kishida, 1923は 日本の特産で、九州から琉球にかけて居り、分布区域は全北地方と東洋地方とにまたがって居る。腹部に明瞭な背板と腹板とを有って居り、環節結構の著しい蜘蛛の中では蛛疣が7本しか無い点が強く注意を惹く。現在唯一種しか知れて居らぬ。此属と最も近縁なのはリヒチウム属 *Liphistius* Schioedte, 1849 であって、次記の5種が知られて居るが、蛛疣の点ではキムラグモよりも原的であり、背甲胸板及び雄の触肢器官に於てはキムラグモよりも近代的である。

- (1) *Liphistius desultor* Schioedte, 1849 [*L. mammillatus* pickard-cambridge, 1875] ピナン島
 (2) *Liphistius sumatranaus* Thorell, 1890 スマトラ島
 (3) *Liphistius birmanicus* Thorell, 1897 ビルマ
 (4) *Liphistius batuensis* Abram, 1923
 (5) *Liphistius malayanus* Abraham, 1923

即ちリヒチウム属は印度馬来及び印度支那両亞地方産のものである。キムラグモ科のもので蛛疣の点で最も近代的なものはアナジストテレ属 *Anadiastothelae* Simon, 1903 であって、スマトラ島産の唯一種 *Anadiastothelae* Thorelli Simon, 1903だけが既知であるが、其の8本ある蛛疣は独特な近代型ですべて一節きりであり且つ円柱状を呈して居る。頭胸部の厚いことはキムラグモ型であり、胸板の形状はリヒチウム型である。

キムラグモ科3属7種の分布を通覧する時、此科が本来印度支那両亞地方を中心として起発したものであって、二次的に南方、印度馬来、北方、日本までも移動したらしいことが想像せられ、且つ形態や習性を念頭に置いて考察すると何れの種も原的だと云うのは現存の他科のものに対してのことには過ぎず、キムラグモ科としては更に原的な形体があったもので、夫れから進出した末梢的近代的な代表者であることがわかるのである。

チグモ属 *Atypus* Latreille, 1804 は歐州産の *Atypus piceus* (Sulzer, 1776) [sub:Araner] を模式種として居るが、属としての分布状況は乍らも甚だ広く、旧世界では東は日本から、西はアイルランドに至り、南はジャバから北は北緯50° よりも北方の地域に及んで居る。又、新世界に於ては米国のミシシッピ川よりも東部の地方に居り、南はフロリダ半島から、北は北緯45° のエスコンシン州にまでひろがって居る。すべて低地は勿論相当の山地まで棲息して居り、疣亞目中、最も北

の方まで分布する種類であり、其の起源や分布の方式はカネコトタテグモ科同様なものと考えられる。本邦産は2種に分けるが、全体として北は津軽海峡を以て限界とし、南は台湾に及んで居るのである。

同じ科に隸するところのワスレナグモ属 *Calommata* Lucas, 1837は誤ってブラジルバビア産として記載せられたところの *Calommata fulvipes* Lucas, 1837 を模式種とし、デグモ属よりも更に分化した高等なものである。分布は非常に極限せられ、旧世界だけに居り、それも西アフリカのカメランを除くと、東の方のジャバ・スマトラ・シャム・ビルマ・南支那及日本から知られて居るだけである。此の属の分布、殊に本邦産の種は印度支那亜地方系のものではあるが、アフリカ産のものがとても別属とすることの出来ぬものである点から見て、起原や分布様式はデグモ属と同様なものと考えるのが可い。一寸頭をひねったところではキムラグモ式の様にも思われるがそれは正当でないらしい。何しろ化石が少しも知られて居ないので、判断が他方から証明されないので遺憾である。

兎に角、本邦では北方、秋田県、宮城県から南方、九州まで知られて居る。

パラオグモ属 *Idiomma* Ausserer, 1871 はオーストラリア・パプア島・ニューカシドニア及パラオ島の産である。其のオーストラリア地方系なることは疑え余地が無い。

カネコトタテグモ属 *Acattyma* Koch, 1877は日本特産である。又カネコトタテグモ1種だけしか知れて居らぬ。明治十年にルートビッヒコッホ氏が記載した以来、長い間学者の手に入らず、ほんとうの棲息地も日本と云う漠然たることしか知れなかつたのである。それが大正七年八月長野県上伊奈郡南向村に於て金子光司氏に依って採集せられた。唯7匹であったが、成体の♀であつて、コッホ氏の原記載通りの珍品なることが明らかにわかつた。カネコトタテグモ科には外に北米産の3属を含む。カネコトタテグモに最も近縁なのはアンツロデエッス属 *Antrodiaetus* Ausserer, 1871 [*Brachybothium* Simon, 1884 *Nidivalvata* Atkinson, 1886]であつて、6種知られて居る。北米での分布は東、バージニア州やノースカロリナ州から西、カリホルニア州まで南、テキサス・アラバマ両州から北、モンタナ州並びに英領コランビア（クキンシャーロット島）に及び頗る広汎である。カネコトタテグモやアンツロデエッス属に近い乍らも6本の躰疣を有し更に原的なのはアチポイデス属 *Atypoides* Pickard-Cambridge, 1883 であつて、カリホルニア州バークレー産の唯1種だけが既知である。管孔がトタテグモ型でなく、日本のデグモ型のもので、そのために名高い。他の一属はアリアチプス *Ariatypus* Smith, 1908と云い、やはり カリホルニア州産であるが、前記の諸種とはちがつて山地に住み、単純なトタテグモ型の管孔を営み、背甲の中窓は縦溝を為さず、丸い になっている。

カネコトタテグモ科は第三紀の昔ベーリング海峡がまだ開かず、アラスカとシベリアが陸つづきであった頃に其の附近に棲息して居た祖型から出たところの残胤から出来て居る小さい科であつて、北米と東アジアとに分れて棲息する様になったのは恐らく第三紀鮮新世晩年から後のことと、その頃北方に起つたところの寒冷な気候を避けて南方に進出したものにちがいない。従つて其れが現今見る通りの分布を有つ様になったのは氷期の終近く（第四紀洪積世末葉）温暖の回復してからのことであろうと想像せられる。

岸田久吉先生の遺稿について

萱嶋 泉

今回キシダイア10号に載せた、先生の二つの論文は、先生の御逝去後、蔵書を整理している時に机の抽出から出てきたもので、どこにも発表なされていないように思われる所以ここに載せたのである。カネコトタテグモを岸田先生は、はじめシナノトタテグモと和名を考えた様子も原稿から察することが出来る。

先生の御遺族の所には、まだまだ多くの遺稿が残されている。この遺稿も私共の手で整理をし、少しずつこのキシダイアに載せて、先生の御仕事を世に紹介したいと思う。かなり新種の未発表の原稿があるが、これは標本が無い為に専門の学術誌に載せることが出来ないので、このキシダイアで先生がこの様な御仕事をしたと言うことだけ報ずることにした。先生はかねがね日本産蜘蛛学なる大著を出版される計画を御持ちであったので、多くの原稿が発表にならずにいたものと思われる所以ある。このキシダイアは専門誌でないから、ここに新種の記録を発表してもこれが、学問的価値を生ずるとは思わない。ほんとうに立派な先生の記載が、標本のないためにうもれてしまうのが残念でならないのである。

K I S H I D A I A

発行所 東京都日野市豊田1896

萱嶋 泉方

東京蜘蛛談話会

発行日 昭和44年11月20日

あとがき

KISHIDAIA新版復刻にあたって

1969年にKISHIDAIAの1号が発行されてから、早いもので20年の年月を数えるになりました。萱嶋先生のお宅に集まって談話会を開いていたメンバーによって、岸田先生の蔵書目録や遺稿を残すために、発行されたのが始まりでした。その後、内容は各々の研究や採集などの報告に順次移っていましたが、それは自然の成り行きと言えましょう。今日発足時の6人から会員も120人にと増えています。また、活動内容も採集会、同定会、合宿、総会と幅広い分野を手がけてきました。そうした活動を支えてきたのは各会員の活躍と、KISHIDAIAだとも言えます。KISHIDAIAは当初の月1回のペーパースタイルから現在の年1.5~2回の30余頁にもなる製本スタイルで、57号が発行されています。

このような中で、会員が増えるにしたがい、バックナンバーの希望も多く出てきました。しかし、中には在庫の無くなったものもあり、中でも謄写版印刷のものについては、コピー万能の現在とは言えインクのにじみなどでコピーに耐えられなくなったものも出てきました。そのような現状からKISHIDAIA発行20周年の記念にと検討した結果、No.1~10までを復刻することになりました。復刻に際し、旧版をそのまま写真製版したのでは読みにくい点も多々在り、新に書き直しての新版復刻にすることに決りました。

新版はワープロ打ちでそのまま印刷することになりました。打ち込みにあたり、なるべく旧版の状態を残すようにしましたが、ワープロの性能上その味わいが出ない所があるのは否めません。

また、新版にしたことにより、次の点を改めました。

1. スモールキャピタルは小文字にしました。
2. “。”は“。”に“、”は“，”に直しました。
3. 各号、特に謄写印刷のものについては行数、文字数にばらつきが多かったので、現在の1頁36行44字としました。

新版復刻にあたり、表紙をいつものように小澤實樹氏にお願いしました。また、萱嶋泉先生、小野展嗣氏、国見裕久氏、大河内哲二氏、高橋登氏、谷川明男氏、熊田理恵氏をはじめ多くの会員の方にお世話になりました。最後になりましたが、厚くお礼申し上げます。

(熊田 繁一)

岸田文庫（故岸田久吉氏蔵書）の保管についてのお知らせ

岸田文庫とは、故岸田先生の蔵書のうちクモに関するものを、御遺族から萱嶋泉先生を始め当時蔵書整理に当たった談話会会員に、寄託されて出来たものです。KISHIDAIAの蔵書目録にも記されているように、当初は談話会が保管していましたが、その後、保管方法について寄託された方々を交え運営委員会において再検討を行いました。その結果、談話会の運営とは別に保管することに決まりました。新版復刻に当たり、会員諸氏にお知らせいたします。

現在は萱嶋泉先生・松本誠治氏・新海栄一氏が管理責任者となり、文庫の保管は新海栄一氏が担当しています。

文庫についての問い合わせは新海栄一氏（〒185 東京都国分寺市本多1-6-6）が受け付けております。

KISHIDAIA 1989年 8月15日印刷 復刻者 熊田 憲一
No. 1~10新版復刻 1989年 8月16日発行 発行者 萱島 泉
発行所 東京蜘蛛談話会
東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部 小野 展嗣方

印刷所 イチカワ印刷所

〒357 埼玉県飯能市新町24-7